

ISSN 2189-3268

大学連携会議「学輪 IIDA」

機関誌 「学輪」

第 10 号 2022

飯 田 市

大学連携会議「学輪IIDA」  
**機関誌「学輪」**  
第10号 2022

**1 機関誌「学輪」(第10号) 発刊にあたって**

飯田市長 佐藤 健 P. 3

**2 学輪IIDAの取組**

令和3年度 大学連携会議「学輪IIDA」全体会 公開セッション

P. 5

つながること、学びあうことの可能性 ～コロナから再興し、私たちの地域の未来を創る～

【コーディネーター】

関西大学社会学部 教授 草 郷 孝 好

【パネリスト】

立教大学 名誉教授 阿 部 治

飯田市南信濃公民館 主事 宮 田 浩 司

飯田女子高校 教諭 福 田 真 澄

飯田市美術博物館 学芸員 四 方 圭一郎

**3 研究ノート**

長野県飯田市遠山郷のゲストハウスの展開と役割

P. 17

松本大学大学院総合経営研究科 田 開 寛太郎

松本大学大学院総合経営研究科 中 村 拓 磨

**4 大学連携会議「学輪IIDA」の趣旨とこれまでの歩み**

P. 26



## 機関誌「学輪」(第10号) 発刊にあたって



飯田市長 佐藤 健

学輪IIDAの機関誌「学輪」は平成27年に創刊されて以来、飯田で展開される大学関係者と地域との連携による教育・研究・調査活動等の成果を編纂して発信し、学輪IIDAの活動をより多くの方に知っていただく役割を果たしてまいりました。

このたび第10号の発行にあたり、編集委員及び編集局を務めていただきました先生方、原稿を寄せていただいた方々をはじめ、ご協力をいただきました多くの関係者の皆様に深く感謝申し上げます。

学輪IIDAは、「21世紀型の新しいアカデミーの機能や場づくり」をコンセプトに、4年制大学を有しない「飯田」を起点として大学研究者同士が相互につながり、専門的な知見や外部の視点を生かしたモデル的な研究や取り組みを地域とともに行う有機的なネットワーク組織として、平成23年1月に設立されました。

当初19大学43名のメンバーで始まったこの取り組みは、その後も「飯田」に興味・関心を持つ日本全国の様々な大学研究者の皆さんが相互に出会い、つながることで成長を続け、現在は73の大学・高等教育機関、研究機関に所属される141名の方にご参加いただくまでになりました。

近年は、より市民のみなさんとの接点を大切に活動していただいております。複数大学が連携して行うフィールドスタディにおいて地元高校生が大学生と一緒に学ぶ「高大連携」、大学研究者と地元研究者が同じ立場で研究成果を発表し市民と共に学び合う「飯田学(輪)大学」の開催など、専門的な知と当地域に蓄積されてきた知との交流が進みつつあると感じています。また、令和4年5月に飯田駅前に新たな知の創発の拠点としてオープンした「ムトスぶらざ」では、学輪IIDAメンバーの皆様にはこの拠点の可能性を広げる様々な取組を展開していただいております。市民のみなさんとの学習・交流を深めていただいておりますことに感謝申し上げます。

当市はリニア中央新幹線や三遠南信自動車道の開通を目前に控えた大変革の時期にあり、その変化を見据えながらまちづくりを進めていますが、その中で新たに「大学のあるまちづくり」を掲げ、取り組みを始めました。学輪IIDAの知のネットワークの充実と併せて4年制大学の誘致を進めることによって、不透明な時代を切り開くために求められる豊かな知の蓄積と活用に向けた取組を進めていきたいと考えています。学輪IIDAのメンバーの皆様には、引き続き、幅広い分野で飯田市民のみなさんとの交流をさらに深化させ、飯田の価値を高めていただき、リニア時代における当地域のさらなる求心力を市民との協働によって生み出していただくことを期待しています。どうぞよろしくお願いいたします。



## 令和3年度 大学連携会議「学輪IIDA」全体会 公開セッション

令和4年1月22日(土)

ウェブ会議システム(Zoom)による開催

### つながること、学びあうことの可能性

～コロナから再興し、私たちの地域の未来を創る～

#### 公開セッション

##### ○司会

これより、学輪IIDA全体会パネルディスカッションを開催いたします。テーマは「つながること、学びあうことの可能性、コロナから再興し、私たちの地域の未来を創る」でございます。

パネルディスカッションの開催にあたり、コーディネーター、そしてパネリストとして5名の方にお集まりいただいておりますのでご紹介をさせていただきます。



(コーディネーター・パネリストの皆様)

コーディネーターは、関西大学社会学部教授の草郷孝好さんです。

続きましてパネリストは、立教大学名誉教授の阿部治さん、飯田市南信濃公民館主事の宮田浩司さん、飯田女子高校教諭の福田真澄さん、飯田市美術博物館学芸員の四方圭一郎さんです。

それでは草郷さん、進行をよろしく願いいたします。

##### ○草郷孝好氏 (関西大学)

それではここから、パネルディスカッションを始めさせていただきます。今回のパネルディスカッションは「つながること、学びあうことの可能性、コロナから再興し、私たちの地域の未来を創る」と題して展開していきたいと思っております。

パネルディスカッションを進めるにあたって、まずは私の方から今回のパネルディスカッションの底流にある「私達が今置かれている課題はなんだろうか」ということにつ

いて、少しお話をさせていただきます。

本日を迎えるにあたって、私達が今生きている時代を考える際の4つのポイントを取り上げておきました。1つ目は、持続可能な地域社会をつくっていくということ。2つ目は、ウェルビーイングをもっと大事にしていくという点。3つ目は、住民が地域の運営・デザインに主体的に参画していくということ。最後に、学びあいと協働活動によって、地域にあるものを活かして魅力的なまちをつくっていくということです。

#### 地域づくりを考えるためのポイント

- 持続可能な地域社会の実現を目指す
- ウェルビーイングを大切にする
- 住民が主体的に地域運営に参画する
- 学び合いと協働によって、地域のあるものを活かして魅力的なまちをつくる

これらが重要になってきている理由としては、私たちが取り巻いている課題は非常に多岐にわたっており、厄介な課題が多いということがあります。もちろん新しい技術など未来を期待させるものもありますが、基本的にはかなりチャレンジングな課題が詰まっていると思います。具体的に言えば、私たちが直面し、コロナ禍になって先鋭化した課題として「教育における問題」、「経済における格差の問題」、「環境における気候変動や気候危機の問題」、それから基本中の基本として「健康面の問題」が身近なものとして差し迫っているということが、私たちの生活の中における問題の位置づけかと思っております。私達は今、こうした問題に向き合っていかなければいけないタイミングにあり、将来の展望として「このままで持続可能な発展は可能か」ということです。

これらの中には、実は日本のみならず世界各国共通の課題がたくさんあり、そこで近代化を牽引してきた経済成長モデルから、ちょっと立ち止まって考えるという動きが出

てきています。もう少し言い方を変えると、これまではお金をたくさん稼ぐ、あるいは貯めていく先に未来が開かれるという割と単純な考え方で進んできたと思いますが、ウェルビーイングという言葉に代表される「幸福」や「健康」といったものをもっと大事にする社会をつくろうということが、2015年に国連の2030アジェンダという形で合意されました。2030アジェンダの大きなメッセージは「誰一人取り残さない持続可能な社会をつくろう」というものです。このアジェンダの後半部分に、みなさんにも馴染みがあるSDGsについて示されています。SDGsのロゴなどは、みなさんもお覧になったことがあるのではないかと思います。このロゴも大事なのですが、それ以上に重要なことはこの2030アジェンダが目指すもの、つまりSDGsがなぜ重要かという点だと思っています。ここには、誰一人取り残さない持続可能な社会に関する3つの顔について書かれています。1つ目の顔は、誰もが人間らしい生活ができる社会。2つ目の顔は、お互いを認め合い、多様性があり、共生する社会。3つ目は、環境と共存する循環型経済。SDGsのロゴにある17の目標は、この3つの顔を持った誰一人取り残さない持続可能な社会をつくるためのものです。

では、私たちの身の周りの問題とも直結しているこの大きな課題に対して、地域レベルでどのように向き合うのかという話をさせていただきます。これは飯田のテーマでもあると思いますが、持続可能な社会を地域でつくるためには、1つ目として、地域の住民・行政・事業所など地域の当事者が協働し、持続可能な地域を構想していくこと。2つ目は、地域固有の文化・くらし・知恵・学びをしっかりと活かすということ。SDGsはかなり網羅的なものですが、実は文化という側面ではそれほど強くありません。私は持続可能な地域をつくっていくためにこの文化という点がとても大事であると考えています。こうなりますと、これまでは課題が複雑だということで、ややもすると専門家や行政主導で物事を進められてきたことが多々あったかと思いますが、これからの社会はそれぞれの場において、地域の主人公と言いますか、担い手であり牽引役である住民が地域の将来ビジョンを考えたり、その実現のための工夫やアイデアを出して動いていったりすることが重要な時代が来ていると考えています。

一例を挙げますと、これまでも地域協働はたくさんやられてきていますが、そのスタイルはどちらかというと、行政が主導しながら市民に参加・参画してもらおう形が多かったと思います。これからの時代の地域協働として私たちが取り入れていくのは、市民が主導していき、そこに行政や専門家が支援をしていくような在り方だと思います。そのような視点でまちづくりをしている街は、世界にたくさん広がっています。その中で、私自身が少し関わらせてもらってきた愛知県長久手市について紹介します。長久手市

は2050年に市民の幸福度が高い福祉のまちになりたいという目標を掲げており、地域協働や住民や行政をはじめとした連携によって、具体的には地域共生ステーションをつくったり、あるいは幸せのものさしをつくったりする活動をし、住民がお客さんにならないまちをつくるということに取り組んでいます。例えば総合計画や市民まちづくり計画、まちを育てるアクションブックなど、市民のアイデアが詰まった手作り感満載のものをつくりながら、市民が動かしていく長久手市に取り組んでいます。そういった背景もあって、冒頭に述べた4点「持続可能な地域社会を実現する」、「ウェルビーイングを大事にしよう」、「住民が主体的に参画する」、「学びあいと協働で地域のあるものを活かして魅力的なまちをつくろう」ということが大事な点ではないかと考えています。

そういうことで、本日は飯田の幅広い分野から、飯田のこれからを考えるうえで非常に参考になる活動に力を注いでおられる4名のみなさんにお集まりいただきました。今からの進め方ですが、まずパネリストの方から順番に自己紹介と取組の紹介を行っていただきます。そのうえで、ラウンド1では「コロナ禍で気づいたことや可能性」についてお話をうかがいたいと思います。ラウンド2では、これからの飯田を含めて「住みたいまちのキモとは何か、そこで学び・学びあいということがどう関わってくるか」ということについて幅広くうかがいます。また、これだけにとどまらず時間が許す限り話を進めていきたいと思っています。それでは早速ですが、阿部さんから自己紹介ならびに取組についてお願いします。

#### ○阿部治氏（立教大学）

こんにちは。私は環境教育、ESDを専門としております。ESDというのは、先ほどありましたSDGsの「SD」に教育を表すEducationの「E」をつけてEducation for Sustainable Development、つまり「持続可能な開発のための教育」を指します。これは、私どもが日本から、政府とNGOが一緒になって国連に提案し、国連ESDの10年として2005年から2014年の10年間取り組んできたものです。そしてその後も、国連はこれを進めています。SDGsが出てきてからは「ESD for 2030」として、SDGsの全ての目標を達成していくためにはこのESD、つまり人づくりが不可欠であるという認識の下、国際的に取り組まれ、日本においても学校教育をはじめ様々なところで取り組まれています。私はこれを提唱し、また日本における環境教育、ESDをつくって参りました。現在も持続可能な地域、地方創生のための人づくりとしてESD・地域創生に取り組んでおり、2017年には立教大学ESD研究所の所長として、飯田市とESD地域創生連携協定を締結いたしました。そして主に、人口が急激に減少している遠山郷地域において、ここを持続可能な地域にしていこうと様々な活動を展開しています。特に遠山郷の



多様な資源をベースにした関係人口の増加、教育移住、環境移住等に取り組んでいます。このことは、この後に行われる飯田学輪大学の2コマ目で詳しくお話ししますので、ぜひ聞いていただければと思います。飯田において私が大切にしていることは、まさに対面でのコミュニケーションです。以上です。

#### ○草郷孝好氏（関西大学）

阿部さん、ありがとうございます。続きまして、遠山郷ということでつながりがありそうな宮田さんに、自己紹介と取組についてお話をお願いしたいと思います。

#### ○宮田浩司氏（飯田市南信濃公民館）

どうぞよろしくをお願いします。私は、山・里・街の多様な文化・風土が根付く飯田市20地区の中で、市街地から車で1時間ほどの場所に位置している遠山郷の南信濃地区で公民館主事をしております。ちなみに出身も南信濃地区の隣の上村地区で、両地区を総称して遠山郷と呼ばれております。市内で最も山深く、また山林原野が約97%を占める地域に脈々と受け継がれてきた伝統文化と雄大な自然の中で暮らし、また公民館主事として勤めております。私自身、進学を機に一度県外へ出ましたが、やっぱり地元が好きという強い想いがあり、Uターンを決心して帰ってきて現在に至ります。また、プライベートでは父と狩猟に出かけたり、春は山菜採り、秋はキノコ採りをしたり、年間を通してこの地域の活動に参加したりと、本当に地元が大好きであります。何より、暮らしの延長線上にある遠山の霜月祭というこの伝統文化芸能が私にとって本当に大切なものであり、原動力にもなっています。

遠山郷の人口は約1,600人余りです。南信濃地区においては少子化による保育園・小学校の存続問題、また高齢化率61%によるコミュニティ維持の問題など課題は山積しておりますけれども、公民館を拠点にしながら学びと交流の事業を支援しています。例えば、公民館の専門委員会という活動があり、そこでは住民から選ばれた役員のみなさんがコロナ禍であっても今できること、大切にすることをみんなで一生懸命考えて、深め合いながら会議を重ね、住民のために活動しています。また近年、Uターンをする若者たちが増えてきて、自分たちが遠山郷で楽しく暮らすということを体現しています。こうしたことについては、セッションの中でお話ができればと思います。

遠山郷では、先ほど申し上げた様々な課題、状況を打開しようということで、住民・学校・行政が一体となった、持続可能なまちづくりに向けた活動も活発になっています。生産人口も本当に減っていく中で、ある種の総力戦といった形で、地域の機運も少しずつ上がっているところです。私自身、ここで魅力を感じながら暮らしていますが、やはりそれと同時に先人を敬い、また山の恵みに感謝するということを大切にしたいと感じています。本日は、遠山郷を

愛する住民でもあり、公民館主事でもあるということで、時折いろんな人格が出ると思いますが、どうぞよろしくをお願いします。

#### ○草郷孝好氏（関西大学）

宮田さん、どうもありがとうございました。色々な人格、楽しみにしています。続きまして、人づくりということとかなり深い関係がある福田さんから、自己紹介とそれから取組についてお願いしたいと思います。

#### ○福田真澄氏（飯田女子高等学校）

私は飯田女子高校でキャリア教育・探究活動を担当しています。教えている教科は理科で、主に地学と生物です。教員として大切にしていることは、生徒との感動・感情の共有、教えるというスタンスよりは生徒と一緒に学び、ともに成長できる教員でありたいと思っています。また、キャリア教育を担当しているということで、生徒たちにとって自分のやりたいことや進む方向性が見つかる高校3年間になってほしいと思っています。そのために行っていることとして、自分が担当している取組について少し紹介させていただきます。

キャリア教育で必要なことは、生徒が自分自身を理解し、また社会を理解して自分の進む方向を見つけていくことだと思っています。そのために用意していることとして、多くの学校で進路ガイダンスを実施していると思いますが、飯田市では高校生と地元企業とをつなぐ事業というものが展開されておりますので、本校ではその担当である飯田市産業振興課と連携し、そこに協力していただいている地元企業の方の話が聞ける「つなぐガイダンス」を実施しています。また、様々な熱い想いを持った大人の方々に来ていただいて幅広い人生観に触れることのできる「変な大人50人に出会う企画」を実施しており、これには佐藤飯田市長にもお越しいただきました。ここ最近では、例えば遠山の猟師である益山さんをお呼びして「いのちをいただく」というテーマで授業をしていただいたり、地元の音楽を牽引しているミュージシャンの桑原さんにお越しいただき「音楽の力で世界をつなぐ」というテーマでお話をいただいたりもしました。その他、様々な方をお呼びして、生徒にいろんな大人の生き方を知ってもらう機会を用意しています。

また、本校の探究活動には少し特徴がありまして、もちろん授業でも総合的な探究の学習ですとか、それから家庭科の授業を中心に探究的な活動をやっていますが、本校には超少人数制でクラブ活動や生徒会活動の代わりに探究活動に取り組むEクラスというクラスがあります。そこでは、1・2年生がゼミ形式で探究活動を行います。今年は5つのテーマでゼミを開講しており、この中で生徒たちは自分たちのやりたいことをとことん掘り下げる貴重な時間を過ごしています。クラス単位でも探究活動に取り組んでおり、



私が担当している2年生のクラスでは地域と連携して蕎麦づくりに取り組んできました。蕎麦づくりをしながら、そこに関連する色々な行事を、年間を通じて企画運営しています。出来上がった蕎麦粉は、本来でしたら文化祭で自分たちで生徒や先生に振る舞いたかったのですが、それができなかったので、自分たちでコンセプトをつくって、地元のイタリアンレストランに蕎麦粉とメニューを提案させていただきました。

私自身が感じていることは、生徒のキャリア形成にはやはり色々な人との関わりが必要だということです。人成るとい言葉もありますが、人は人と交わって人となっていくのだなと改めて実感しています。私たち教員にできることとしては、まずは生徒のやる気に火をつけること。そして最高のコーディネーターになることだと思っています。まずは私たちも一大人として生きる姿で示していけたらいいなと思っています。とにかく生徒のやりたいことを全力でサポートしていきたいと思っています。そんな毎日をご過ごしています。よろしくをお願いします。

#### ○草郷孝好氏（関西大学）

ありがとうございます。本当に多彩な取組をされているようで、後の話がとても楽しみになりました。最後に、四方さんに自己紹介と取組についてお願いできますか。

#### ○四方圭一郎氏（飯田市美術博物館）

初めまして。私は飯田市美術博物館で、自然分野の生物担当の学芸員をしております。名字を見ていただくとわかるように、私はこの地域の生まれではありません。京都府綾部市という日本海に近い街に生まれ育ちました。関西出身ではありますが、飯田市に住みだして25年になりますので、1ターンをしてきてこの街の人間になっていると自負しています。

私の専門は昆虫学ですが、美術博物館では生物担当ということで動物も植物も全ての生き物を扱っております。経験も知識も足りない中で、多くの人に助けをもらいながら博物館活動を進めています。この何年かは、南アルプスがユネスコエコパークに認定されていることに関連して、南アルプスの高山帯から亜高山帯で生物の調査をしています。私は昆虫の中でも特に蛾が専門ですので、重い発電機を背負って山に上がってライトをつけ、どんな蛾がいるのか、増えているのか減っているのかなどを調べています。蛾の調査なんかして何になるんだという感じもあるかもしれませんが、今みなさんがご存知のように地球温暖化が喫緊の課題になっておりまして、実際私たちの周りでも温暖化しているという実感もお持ちだと思います。こうした高山帯は真っ先に影響を受けるところで、今ちゃんと調べておかないと10年後には同じ自然が失われている可能性があります。そういうこともあって、使命感を持って調査に取り組んでいます。

私がやっている美術博物館の自然分野での学びについて、少しお話をします。大事にしているのは、驚きやおもしろさ、それから美しさなんかを伝えていくということです。生物の持っている物語をみなさんに伝えていきたいと思っています。それを伝えることで、みなさんが持っている「モノを観るものさし」が、画一的なものではなく多様なものになり、多くの人が多く視点で、違った価値観で観られるようなことを進めていきたいと思っています。今日はこんな視点でお話をさせていただきたいと思います。どうぞよろしくをお願いします。

#### ○草郷孝好氏（関西大学）

どうもありがとうございます。飯田の中で非常に多彩な取組を展開されてきた4名の方にご登壇いただいているということがお分かりいただけたかと思います。これからは2つの問いについて、みなさんに順番にお話をうかがいながら、時間は限られますが意見交換の時間もとっていききたいと思っています。

最初の問いは、今日のテーマの1つであるコロナです。私たちはコロナ禍で様々な取組の修正を余儀なくされたという経験をしてきたわけですが、みなさんが取組の中で大事にされてきた点も、コロナによってかなり大きな影響を受けたのではないかと思います。そこでみなさんには、コロナ禍の中で経験されたことを踏まえてお気づきになったことや課題、可能性も含めて、コロナから何を学んできたのかということをお聞きしたいと思います。ラウンド1は順番を反転させて、四方さんからお願いできればと思います。

#### ○四方圭一郎氏（飯田市美術博物館）

私が勤めております飯田市美術博物館も、只今コロナの関係で休館中です。これまでもコロナ禍で何度かこのような休館を体験しまして、その度に講座や展覧会を中止にしたり、最近はオンラインに切り替えてやったりもしています。そんな中ですごく感じることは、そういった社会の変化、例えばオンライン化した時に、ついて来られる人について来られない人が二極化しつつあるのではないかという危機感です。コロナ禍で博物館の展示や普及活動の在り方について考える時間ができ、そんなことを感じながら、また今も悩んでいるところです。

最近考えていることとしては、これまで行われてきた学校教育に代表されるような「一对多数」の学びの在り方というものが崩れて輪郭が曖昧になってきて、「一对一」とか「複数対複数」といった学びの方向がでてきているのではないかと感じています。これはネットワークの多様化とも相まって、学びの構造が変化してきているのではないかと感じているところです。これまでの学びは、どこか大多数のものが正しくて、それに少数派を取り込んで共通認識をつくっていくということが主流だったような気がするんです

が、このコロナを受けて色々と考えている中で、今後は大多数側、俗にマジョリティと呼ばれる組織や立場にいる人たちが少数派の中に立ってみることで、新たな学びを見つけていくための価値観を考えていく時代になるのではないかと思います。例えば、最近話題になっていますが、目の見えない方が美術展を鑑賞するというようなことの中から見出していく学びの価値です。実は、これは先日、国立民俗博物館の広瀬先生の講演を聞いて特に強く感じたことなんです。広瀬先生は全盲の方ですが、その先生が「触る展示」というものを企画されまして、それはもちろん目の見えない人への展示ではあるんですが、目が見えているマジョリティ側の人がそこに立つことで社会の見方が変わるのではないかということをおっしゃってまして、私自身本当にハッとしました。自分の立ち位置を変えることでこれまで見えていなかったものに気づくということがおもしろくて、このコロナの影響を受けながら考える中で、これはこれからの学びの重要なポイントになるのではないかと思った次第です。

#### ○草郷孝好氏（関西大学）

なるほど。気づき、多様性、それから学校教育ということでお話をいただきました。様々な課題を抱えている中で四方さんが気づかれた点、これも後程掘り下げていくことができるかもしれません。続きまして、もしかしたら既にコロナ禍を乗り越えて取組をされているのかもしれませんが、それも含めて本当に活発に様々な取組を展開されている福田さんにお話をうかがえればと思います。

#### ○福田真澄氏（飯田女子高等学校）

やはりコロナの影響で学校現場ではできないことがすごくたくさん増えて、この時代に高校生活、中学校生活、小学校生活で本来できることができずに、この貴重な若い時期を過ごしてしまうということが大変残念に思います。しかし、だからと言って私たち大人も生徒も、このコロナ禍をただ悲観していても何ものならないので、コロナ禍だからこそ考えられること、そしてできることを生徒も教員も一緒に考えることがとても大事なんだということを痛感する毎日です。動ける時に動くことも大事ですし、動ける範囲内で協力してやるということも大事ですし、またいざ動けるようになった時のためにその準備を念入りにする。そんな発想の転換が大事だと思っています。

#### ○草郷孝好氏（関西大学）

先ほど紹介された色々な取組がありましたが、その中で色々工夫してやってこられたという理解でよろしいですか。

#### ○福田真澄氏（飯田女子高等学校）

はい。例えば先ほど紹介したつなぐ事業では、来週末にも保育士さんをお呼びしており、このコロナ禍では学校の中に立ち入っていただくことができないのでオンラインになってしまっていますが、リアルタイムでお話を聞いて質疑応

答もできるような形で設定しています。また例えば、私のクラスに漫画の編集者として働きたいという生徒がいます。その生徒がこの一年間、自身の進路について情報を収集する中でどんなことを調べてきたかという、まずはオンラインで漫画家さんと実際に話をさせてもらい編集者の仕事や資質について聞かせていただきました。その後、高森町とお付き合いがあった集英社の元編集長を紹介していただいてメールで色々質問をぶつけ、回答をいただいたりもしました。それから、実際に印刷会社の若い女性社長さんをお呼びして、一から企画している様子をうかがったり、コロナがおさまっている時をねらって印刷会社にインターンシップへ行ってみたりもしました。こうしてみると、実は十分なことができていると思うんですね。動ける時に動くための準備をしておくことの大切さを痛感しています。

#### ○草郷孝好氏（関西大学）

ありがとうございました。また後ほど色々掘り下げることができるとおもしろいと思いました。では、続きまして南信濃公民館主事として日夜奮闘されている宮田さんをお願いします。このコロナ禍の中での気づきや経験、それらを踏まえてこれからに向けて何かご意見をうかがえたらと思います。

#### ○宮田浩司氏（飯田市南信濃公民館）

やはり公民館は集うことが当たり前というか、それを大前提としてやってきた中で、コロナ禍においてそれを制限されるということは公民館事業にとって非常に大打撃でした。南信濃だけでなく市内20地区を見ても、コロナ禍で事業の延期や中止が本当に相次いでいました。その中で、私も公民館に携わらせていただきながら、住民のみなさんから見えてきたことがあります。

先ほど少し触れました専門委員会活動の中でも、例えば体育委員会では市民運動会という大きな事業を持っています。これは住民の集いの場であり、住民が唯一、一堂に会してお互いに「マメだったか？」と声を掛け合える場という意味でも実は大事な機会ですが、それができない。そうなった時に、このことが自分たちにとってどういう影響を及ぼすかということ、体育委員のみなさんが考えるわけです。これまで「運動会をどうやってやるか」ということがスタート地点だった議論が、「自分たちが取り組むこの事業は、一体何を大切にしなければいけないのか、何を目的にやっていくのか」というところから始まっていったということをおもまじまじと見させていただきました。

実際の事業は、コロナ禍で自宅にいる高齢の方々も多いということで、少し外へ出て身体を動かす機会として運動会ではなく「運動の集い」という形で実施しました。2時間程度の事業でしたが、やった後に住民のみなさんの「ありがとうございます」という声を聞いた委員さんたちの顔つきは、本当に達成感に満ち溢れていました。

活動すること自体が目的ではなく、今何をやるべきかということを感じ、みんなで確認し合い、話し合うという、公民館活動の根底にあることが引き出せたのではないかと感じます。その中で、最初はやめた方がいいんじゃないと言っていた人たちも「そうだな、よしやってみるか。自分はこういうことができるかな」となり、そこに自分の居場所や役割が見えてくると、より一層チーム力が上がってくる様子を目の当たりにしました。これは仕事面で捉えたことですが、やっぱりヒト・コト・モノの核となるようなところを捉え直す機会になったのではないかと感じています。

一方で、一地区住民としてみた時に、やはりコロナ禍は遠山の霜月祭という伝統文化にも大きく影響を及ぼしています。祭りの時間短縮を余儀なくされ、また「これはできない・あれはできない」と様々な制限をされてきました。時間短縮は致し方ないことですが、本来は太陽が昇り、日が上がってくると同時に生命の復活を祈るというお祭りです。また、お祭りでは煮えたぎった窯の湯を素手で払う「湯切り」を行い、それを浴びた住民のみなさんの無病息災を祈りますが、このことさえ制限されてしまいました。僕自身はこのお祭りのために1年間暮らし、コミュニティをつくり、つながりを維持してきたという自負がある中で、それができないということに対するもどかしさがあります。祭りを運営する上層部のみなさんの、本当に苦渋の決断というのはよくわかるんですけども、やっぱり「コロナだから」ということで片付けられない部分、もっと大切にすべきところがあるのではないかと感じますし、逆に言えば学び直すチャンスもそこにあるのではないかと感じましたところ。今までやってきた「当たり前」を疑うということに気づかされたと感じます。

#### ○草郷孝好氏（関西大学）

ありがとうございます。できること・できないことがあり、できないことの中にもそこを諦めてしまっているのかということに対する考えですね。確かにその辺りはなかなか悩ましいところですね。最後に、コロナの中で気付かれた点、あるいは今後に向けてのアイデアなどということで阿部さんにマイクを渡したいと思います。

#### ○阿部治氏（立教大学）

私も今までのお三方と同じような想いを抱いています。大学もオンラインということになり、私の専門の環境教育も対面あるいは体験がベースにあるものなので、それができなかったという忸怩たる思いがありました。コロナが人獣共通感染症ということで、本来は野生生物の中にコロナが共存していたわけですが、それが人間の開発行為によって外に飛び出してしまった。そういった意味で、人と自然との関わりということを変えて感じました。これは、例えば気候変動でシベリアの凍土が今どんどん溶けているわけ

ですが、その中から新たなウイルスがどんどん出てくるということが予測されていて、コロナはこれから頻繁に起きてくるそんな状況の始まりなのではないかと思っておりません。

私としては、飯田のまち未来に関係する可能性についてお話ししたいと思います。このコロナを契機に、東京一極集中あるいは首都圏一極集中の流れが少し変わるのではないかという見通しができております。これがどう落ち着くかということはまだわかっていませんが、そういった中で、これまで政府が言ってきたけれどもなかなかできなかった地方分散社会というものが、これを機にできるのではないかと感じます。それは、例えばコロナ禍でサテライトオフィスやテレワーク、ワーケーションといった新たな試みが始まってきたことで、飯田のこれまでの地域づくりに加えて、飯田の様々な資源をさらに活用した交流関係人口の拡大、そして移住も視野に入れることができるようになってきたのではないかと感じます。

また先ほど信州大学の学部誘致の話や学輪IIDAの発展の話もありました。こういった中で、大学・高等教育機関として、従来のキャンパスにおける対面的なものだけではなく、オンラインも含めたサテライト大学の可能性がだいぶ出てきたのではないかと感じます。例えば一年、半年、あるいは一学期を飯田で過ごし、飯田の市民と協働しながら学んでいくスタイルが今後可能になっていくのではないかと感じます。そういう意味で、このコロナという災いを逆に活かしていくという可能性もあると思っています。

#### ○草郷孝好氏（関西大学）

ありがとうございました。これからの飯田について、ラウンド2でさらに深めていきたいと思っていますので、阿部さんからお話しいただいた点も、そのところでみなさんと一緒に共有していきたいと思っています。

みなさんのお話をうかがっていて、1つは四方さんが言われた「ついて来られる人・ついて来られない人がいる」という点、これは大変重要ではないかと思いました。私の知り合いにも高校の先生がいますが、高校においてもオンラインを始めたものの、どうもオンライン環境に問題ない家族とそうでない家族がいて、それをどうするのが本当か悩ましいという悲鳴を上げていました。それから、宮田さんの言われた公民館活動について、みんなで話をしていくと言った時に例えばオンラインでも問題ない人とそうでない人の区別があったのかなど、いわゆるWi-Fi環境やオンラインの格差というものは飯田の中で問題になっている部分はないのかということも思いながら聞いていました。この辺り、どなたかご意見などあればお話ししたいのですが、いかがでしょうか。

#### ○阿部治氏（立教大学）

今おっしゃられるように、このコロナが対面だけでなく、



例えばオンラインという新たな可能性を見せてくれたということは確かだろうと思います。先ほど四方さんが美術博物館の現状をお話しされましたけれども、実は日本環境教育学会で、私は委員長として、コロナ禍における環境教育ということで全国の関連施設を調査しました。その中で、多くはマイナス面でしたが、プラス面としてオンラインで海外を含め、国内外の人たちと連携することができるようになり、あるいはコロナ禍において従来の実体験ということだけではなく、バーチャル体験のようなものも意味があるのではないかとという新たな可能性も見えてきたということがありました。

ただし、こうした可能性も、先ほどおっしゃられたオンライン回線のような問題や、どういった境遇にいらっしゃるのかといった社会的な問題に影響される場合がかなり多いのではないかとということがあります。つまり、そういったところに行政がきちんとサポートをしていくことが重要ではないかと思っています。

#### ○草郷孝好氏（関西大学）

そうですね。いわゆる情報インフラをどう整備するのかというところにも関係していますし、そもそもそれに向き合いたくない人たちに対してどうするのかという問題もありますよね。次の問いに行く前にもう1点だけ福田さんにおうかがいしたいのですが、高校生自身が想定していた活動が、コロナ禍で切り替わっていったと思います。そんな中での学びを進めてきた彼女たち自身の感想や気づきなどがあればうかがいたいのですが、高校生のみなさんの様子はどうでしたか。

#### ○福田真澄氏（飯田女子高等学校）

はい、まずは今の格差というところに少し感想を言わせていただくと、確かにオンラインの得手不得手やWi-Fi環境が整っている・整っていないというところで、例えば家において学校のオンライン授業を聴くというところには差が出てしまうと思いますが、だからこそ今、一人一台タブレットを持つということに意義があると思っています。みんなが持つことによって、例えば学校に来るなどWi-Fi環境さえつくることができれば平等に色々な情報が収集できる。そういう意味では、確かに環境の差はありますが、ある意味平等になれたという感じがしています。ですから、私達の役割はやはり、そんな格差を埋めるためにつないであげることなのではないかと思っています。例えば、集団で一度に授業を行うことはできませんが、個別に呼ぶことができます。その差を埋めるというところに私たちの役割があると感じます。

また、活動に取り組む生徒たちは色々な言葉を残されています。最近聞いた言葉の中で私が一番印象に残っているのは、生徒自身が色々な人と出会って行く中で「人が人を生むんだ、みんなつながっているんだ」と言った生徒

がいます。その生徒がさらに言っていたことは「自分がやりたいと声をあげれば、必ずそれに力を貸してくれる人がいるということがわかった」ということでした。それを聞いたときに、そう感じられた生徒は本当に幸せだなと思いました。そういう大人たちに出会えた若者はきっとこの後も自分で主体的に色々なことを学んでいけるのではないかと思います。私たち大人の役割は、生徒と人をつないだり、地域とつないだり、それが生徒の未来をつなぐことになると考えると、「つなぐ」ということはとても大きな意味を持つ言葉になるのではないかと感じています。

#### ○草郷孝好氏（関西大学）

ありがとうございます。生徒のみなさんの受け止め方が素晴らしいですね。感動しました。時間の関係もあるのでそろそろ2つ目の問いにいこうと思いますが、その中で、これまで拾い上げてこられなかった点についても自由に触れていただいて結構です。次の問いは、既に関連する話題もあったと思いますが、これからの飯田が「住みたいまち」を目指すとした時、そのためには何が必要かということですね。特に学輪という場でもありますので、学ぶ・学びあいということについての可能性、それから具体的な提案なんかも歓迎です。そのあたりをまずは順番にうかがえたらと思います。順番を変えて、今回は宮田さんからお願いします。

#### ○宮田浩司氏（飯田市南信濃公民館）

先ほども少しお話ししましたが、私も地域のみなさんと接する中で、自分にもある固定概念という当たり前のものを常に疑っていく必要があると感じます。そこから生まれる他者との学びあいの中で共感を得ることや、「こういう考えがあるんだ」という新しい気づきを通して、自分が楽しくなっていくのを感じるんですね。これは自分の成長でもあるし、集団・グループの成長にもつながっていくと思っています。なにより私も、主事という立場を経験させていただいていることで、自分の視座というものが確立されていっている気がします。

そうした大切な部分を持ちつつ、やはり飯田には20地区があり各地区に公民館があるということで、先ほどの草郷先生のお話にあった「あるものを活かした特色ある地域づくり」というのは、まさにそれぞれで展開できるとしています。この遠山郷においても、阿部先生にも関わっていただいておりますが、この地域の魅力を活かすということで、地域の宝である子どもたちを軸に子どもたちと一緒に活動していくということ。そしてそこには福田先生のおっしゃられた本気の大人、熱量のある地域の方々子どもたちが触れ合うということで、大人の背中を見る環境というのは非常に大事だと思います。なにより今遠山郷にUターンしてきた若者たちは、小中学校での原体験で遠山郷を好きになったから、また帰ってきて何か貢献したいという気

持ちがあるということを常々言っていますので、そうした学びの機会を、公民館を拠点に確保していきたいと思っています。

何か新しいものをつくったり価値を生み出したりする時には、やっぱり先人がここでどういう暮らし・学びをしてきたかという歴史を知ることが大事だと思っています。それらと自分が積み上げてきた経験値がマッチしたときに何か新しい創造が生まれるし、チャレンジングな取組ができると思います。そういった、やりたいことが実現できていくというところを僕も支援していきたいと思ひますし、それが飯田の「住みたいまち」につながっていけばいいなと思っています。

#### ○草郷孝好氏（関西大学）

ありがとうございます。1つストレートにうかがいたいことは、宮田さんは公民館主事をされていて様々な可能性を感じておられると思いますが、例えば宮田さんが市長だったらここはもう思い切って変えた方がいいのではないかとはいえますか。

#### ○宮田浩司氏（飯田市南信濃公民館）

そうですね、僕は「市民」という言葉はあまりしっくりこなくて、現場にいるからこそ「住民」という言葉を使います。これは1つのキーワードだと思っています。地域の中には多数意見・少数意見もありますが、「地域を良くしたい」と思ふ人もいれば「今の暮らしがそのまま続けたい」と思ふ人もいて、そこには濃淡があります。地域に貢献するというを一義的に捉えてそれを正義とするのではなく、色々な人がいて、色々な暮らしやスタイルがあるということ認め合えるようなまちづくりが必要かなと思っています。

#### ○草郷孝好氏（関西大学）

ありがとうございます。多様性というところについてお話をいただきました。次に四方さんにお話をうかがいたいのですが、これからの飯田を住みたいまちにしていくということを一念頭に置きながら、四方さんのご意見をうかがうことができますか。

#### ○四方圭一郎氏（飯田市美術博物館）

先ほど、コロナでインターネット環境やオンラインの活用が可能になったという話がありましたが、これによって「距離」というものがすごく変わったと思うんです。特に、遠くのものすごく近くなった。少なくとも情報という意味では、都会も田舎も差がなくなってきた、私もこれまで東京まで会議に出ていたものがオンラインで済むようになって、そこにかけていた時間を使わなくてよくなったということが普通になってきました。一方で先ほど福田先生がおっしゃられたように、今度は人と人との関係というような近い距離が非常に遠くなってしまっているということが今の問題で、これがこの地域の問題をあぶり出している

気がしています。

つまり、これまで田舎はその距離を短くしようとして都会的になるように地域づくり・まちづくりをしてきたところがあると思いますが、コロナを経て、これからは逆に田舎の中に都会を取り込んでいくということが可能になったのではないかと考えています。その1つのヒントが、宮田さんが活動されている遠山郷にもあるのではないかと考えています。今、遠山郷にUターン・Iターンで来た若者たちの元気さ、そして人と人とのつながりの中ででてくるこの魅力に、それがすごく表れているのではないかと考えています。

おそらくこれから地域づくりを考えていく上では、田舎が都会化していくというところから一旦脱却して地域に都会を取り込んでいくようなフレームにちょっと組み直して、その為今、何をすべきかを考えることが重要になってくるのではないかと考えています。

#### ○草郷孝好氏（関西大学）

ありがとうございます。なるほど、都会化のローカライゼーションという点ですね。四方さんは確か、公民館活動や地域活動にも積極的だとうかがっていますが、やはりそうした中で感じることもありますか。

#### ○四方圭一郎氏（飯田市美術博物館）

そうですね、やはりこれまで昭和の時代というか、不便とか非効率というものを排除していく暮らしが田舎の方へも浸透してきて、「便利なことはいいことだ」、「効率の悪いことはやめましょう」ということが今かなり進んできている気がします。ところが、田舎にはまだまだ非効率であったり不便であったりしても、やっていることに意味があるということもあるわけですね。今後はそこを強みに変えていくということがいいのではないかと考えています。非効率や不便を自分の中に取り込んで、それを少し改善することで得られる幸せとか楽しみ、喜びといったことが、これからの地域づくりのキーワードになってくる気がしますし、地域の学びとか学びあいというものは、それぞれが得たそうした小さなこと、それぞれの価値観の違いをまた共有したり交換したりすることで豊かになってくるものだと思います。これからは、まだ昭和の価値観を引きずっているような地域が、改めて地域の良さを見直していくような活動が大事になってくるのではないかと考えています。

#### ○草郷孝好氏（関西大学）

ありがとうございます。それでは次に福田さんをお願いしたいと思います。福田さんには既にこれからの地域のためにという視点でお話をうかがっていましたが、それに付け加えて何かお話をうかがえることはありますか。

#### ○福田真澄氏（飯田女子高等学校）

密を避けるという点では、これはやはり田舎が持っている特権だと思います。また、この地域には豊かな資源がた

くさんあります。今ゼミ活動で水について探究をしているのですが、天竜川の右岸と左岸で水質も全然違って、そうした水やミネラルを多く含んだ外国の水でご飯やパンをつくってみると硬さも味も全然違うんですね。ですので、南信州ならではの美味しい水とか作物と、人が幸せに長く生きるための健康を結び付けて、密を避けた土地を最大に活用した場所にできるといいと思っています。

若い人たちを見てみると、やはり子どもたちは自分の中にやりたいことが見つかる、本当にどんどん伸びていくんですね。ですので、「やりたい」を見つけられる場所になったらいいなと思います。それが都会に行きたくてやる方が便利ならばその方がいい場合もありますが、若者たちが「ここでしかできない・ここだからできる」やりたいことを見つけられる、もしくは「ここでもできる」ということに何か特徴が打ち出していけるといいなと思います。

またそんな若い人たちの「やりたい」を見つける目を育むのが私たち大人の役割だと思うので、学校としては若者に色々なことに挑戦してもらって、自分の中にある色々なものに気づいてもらうような機会を設けていきたいと思っています。ただそれは学校だけではなかなかやりきれないので、地域・企業・大学等高等教育機関とつなぐためのコーディネート役をやりたくて思っていますので、子どもたちの中に「やりたい」が見つかった時には自分も含め、手を貸していただける地域や周りの大人であってほしいと思います。

#### ○草郷孝好氏（関西大学）

ありがとうございます。それでは、阿部さんにも既に具体的な提案も含めてお話をうかがっていますが、阿部さんご自身のご意見に加えて他のパネリストのみなさんのお話を踏まえて色々な角度からお話をうかがえたらと思います。

#### ○阿部治氏（立教大学）

これからの社会について、草郷さんの冒頭のお話でウェルビーイングを重視した持続可能な社会ということを出されておりました。また、先ほど四方さんがおっしゃった、地方に都会のよいところを呼び寄せるんだという発想、あるいは今福田さんがおっしゃられた若い人が地域のことを考えるということや、宮田さんがずっとやってこられたことなどについてお話がありました。私はこれらを「21世紀型の暮らし」と名付けています。地方という言葉自体にも語弊がありますが、今までは科学技術等も含めた先進的なところに惹かれて、地方から都市へどんどんと人が集まっていたわけですが。しかしこれからは、地域の多様な資源や豊かな文化があるところに大きな可能性があると考えています。飯田も2050年に二酸化炭素の排出をゼロにし、エネルギーの自給を目指していこうという目標を持っていますし、例えば内橋克人さんが言っているFEC自給圏、フードとエネルギーと、それから介護や医療といったケアを自

給できるような地域にしていくこと。そして、そうした社会をボトムアップ的につくっていくことで、飯田が日本一住みたいまちになっていくのではないかと考えています。

その時の学びは決して子どもたちだけの学びではなく、学校と地域、あるいは大人と子どもの協働ということが非常に大事ではないかと思っています。これも既に草郷さんがおっしゃられました、自然、歴史、文化、伝承といったローカル知・地域の知や地域の資源をしっかりと学び、再評価して見える化することが大切です。そして、それをしっかりとつなぐ化することで新たな事業が生まれてきます。例えば遠山郷では、Uターンした若者が地域の資源を活用して新たな事業を興しています。そうしたことを含めて、地域プライドやシビックプライドなど色々な呼び方がありますが、地域に誇りを持てるような学びが必要ではないかと思っています。

#### ○草郷孝好氏（関西大学）

ありがとうございます。これからどんどん話が広がるタイミングで、終わりの時間が迫ってまいりました。と言いながらも、もう一通りみなさんからお話をうかがえたらと思いますので、本当に手短かに、ここでみなさんに伝えておきたいことを含めて自由に発言を受けたいと思いますが、宮田さんいかがでしょうか。

#### ○宮田浩司氏（飯田市南信濃公民館）

住みたいまちは、裏返せばここに住んでいる人たちが郷土愛や誇りをもって暮らしているということが大前提だと思います。医療機関が充実しているとか、教育環境がいいからということだけで、果たして住みたいということになるのかということです。実際に暮らしてみれば色々なお付き合いもありますし、やっぱりここに住んでいる人たちが生き生きと暮らせるために公民館ができることは何か。それを常に自分に問いかけながら、改めて公民館主事をも全うしたいと思ったところです。ありがとうございます。

#### ○草郷孝好氏（関西大学）

ありがとうございます。続きまして、福田さんはいかがですか。

#### ○福田真澄氏（飯田女子高等学校）

色々なお話を聞かせていただいてありがとうございます。私たち大人にできることはやっぱり情熱のある大人、魅力のある大人として生徒のロールモデルになれるような、そんな生き方ができたらと思っています。自分にできることを一生懸命やっていきたいと思いました。ありがとうございました。

#### ○草郷孝好氏（関西大学）

ありがとうございます。四方さん、いかがですか。

#### ○四方圭一郎氏（飯田市美術博物館）

人から見ると何の意味があるのかわからないというものの価値とかおもしろさを伝えることで人とつながっていく



とか、「そんな人があるんだ」というようなことを普通に語り合えるようなまちになると、これは素晴らしいことだと思っています。そのためにはやはり子どもたちともちゃんと向き合わなければいけませんし、これまでの時代を生きてこられた先輩方ともちゃんと向き合わなければいけないと思っています。やはり、人と人とが向き合っていくということがすごく大事ななということを感じました。

#### ○草郷孝好氏（関西大学）

人と人とが向き合うこと、確かにそうですね。それでは阿部さん、最後に一言どうぞよろしくをお願いします。

#### ○阿部治氏（立教大学）

今まで3人の方がおっしゃられたこと、私も全部共感します。それらにプラスして、ここに住みたいという想いだけでは、なかなか住み続けられないのではないかとも思っています。例えば高齢者の方々が移動する手段などのモビリティの問題や、近くにお店があって買い物ができるとか、あるいは先日、別のところでコンビニの移動車を見ましたが、そうした移動販売車が来るといったこともやはり必要だろうと思います。それらを全て含めてSDGsのローカル化、つまり「飯田におけるSDGsってどんなことなんだろう」、「自分事としてのSDGsってどんなことなんだろう」ということを考えることができるかと思っています。そして、生涯学習としてそうした社会をどのようにつくっていくかというESDの視点を、学校だけではなく生涯学習・社会教育の中にもぜひ入れていただきたいと思っています。

#### ○草郷孝好氏（関西大学）

ありがとうございました。本当に短い時間でしたが、みなさんの活動のお話、コロナへの向き合い方、そして今後の飯田についてのお話や提言についてもお聞きすることができたかと思えます。

みなさんのお話をうかがう中で出てきたキーワードとしては、「つながる・つながり方・対面」といった人と人とのつながりに関すること。そして、対面のスタイルに広がりを持たせることができる時代が来たという点。それにはインフラなど目を向けなければいけない条件があるものの、それがしっかりできると例えば多様性も含めて、これまで飯田が持っていたものをさらにグレードアップしていくことができるような可能性があるということ。また、これまでは田舎と都会という対立項の中で都会化していく方向だったものが、実は田舎というベースが人間のウェルビーイングにとって非常に重要であり、飯田においては持続可能な発展ということに光が見えてきたのではないかというお話がありました。

学びの場ということについては、本日みなさんにお話しいただいた点が、これから学びの場を設計していくための要素になると思いました。つまり、「この学びは飯田の中で、どうやって人と人をつなげていくのだろうか」、「こ

の学びの場は、今後飯田をどう変えていくのだろうか」といったところにもっと目を向けながらデザインをして実施していくことに可能性があるのではないかと感じておりました。

今回のパネルディスカッションに向けて、みなさんにたくさんのご準備をしていただきました。本当にありがとうございました。この場のみならず、これからもぜひお互いに情報共有等していけるといいと思っていますし、これをご覧になっているみなさんにもそのことをお願いしたいと思っています。なかなかうまく進められなかった部分は私の責任ということでご容赦ください。本当に楽しく、貴重な時間をいただきありがとうございました。これでパネルディスカッションを終えたいと思います。ありがとうございました。

#### ○司会

皆様方、ありがとうございました。限られた時間ではありましたが、今後の地域づくりに向けて非常に内容の濃い、また示唆に富んだお話をいただき大変ありがとうございました。では、パネルディスカッションの閉会にあたり、飯田市長佐藤健よりご挨拶をさせていただきます。



#### ○佐藤市長

コーディネーターを務めていただきました草郷先生、そして4人のパネリストのみなさん、本当にありがとうございました。非常に中身が深く、まさに草郷先生がおっしゃったように、これからもっとおもしろくなりそうなお話とお時間となってしまいましたが、いろいろなお話をうかがっていて私自身も非常に刺激を受けました。

まず感想としては、宮田さん・四方さんは飯田市という組織の中の職員ですが、日頃はなかなか直接お話をする機会があまりなく、今日はゆっくりと話が聞けました。それぞれなんて頼もしい職員がいるのかと思いました。ぜひこれからもよろしくお話ししたいと思っています。それから福田先生には、変な大人50人と会う企画の一人としてお世話になりました。飯田女子高校のみなさんの取組は本当にすごいことをやっていると思いましたし、先ほど生徒の言葉として伝えていただいた「何かやろうと声をあげれば、誰かが助けてくれるんだ」というように感じてくれている

ということが嬉しいと思いましたが、そういう大人がいてくれるこの地域は本当にありがたいと思ってお聞きをしていました。阿部先生にはいつもお世話になっていて、これからはESDや遠山郷を中心にお世話になりたいと思うんですが、ぜひまた私もアドバイスをいただきながらやっていきたいと思いますのでよろしくお願いします。そして草郷先生には、本当に短い時間の中でまとめていただいたコーディネーターとしての役割に感謝申し上げたいと思います。

冒頭の草郷先生のお話では、文化などこの地域にあるものをどう大事にするかということ、パネルディスカッションの1つの底流として押さえていただいたと思います。私はこの地域の30年先を思い、どんどん変わってしまうものもある中で何を守っていくかということについて考えた時に、文化の部分が大事だと思っています。先ほどの宮田さんの運動会やお祭りの話のように、ややもすると無くなってしまいかもしれないものがある、あるいは未来のためにそういったものを積極的に残していけるのかという心配がいつもあります。積極的な意味で変わらないために変わるというか、変わるために変わらないというか、30年先にもそうした大事なものを残していくということをぜひ、一つの通奏低音として持っておきたいということを思いながら、お話を聞かせていただいております。私の考えていることが上手くみなさんに伝わったかどうかはわかりませんが、ぜひこれからもみなさんと一緒に、30年先の日本一住みたいまちを目指していきたいと思いますので、どうぞよろしくお願いします。本日はどうもありがとうございました。

#### ○司会

以上をもちまして、大学連携会議「学輪IIDA」全体会パネルディスカッション「つながること、学びあうことの可能性～コロナから再興し、私たちの地域の未来を創る～」を終了いたします。



## 長野県飯田市遠山郷のゲストハウスの展開と役割

Development and Role of Guesthouse Tohyamago-Taiyodo, in Iida City, Nagano Prefecture

松本大学大学院総合経営研究科 田開寛太郎

松本大学大学院総合経営研究科 中村 拓磨

### 1. はじめに

本稿では、長野県飯田市遠山郷（南信濃地区）のゲストハウス「太陽堂」を対象に、宿泊施設の経営実態を把握し、地域における役割を整理した上で、今後の研究の展開に寄与することを目的とする。なお、本稿におけるゲストハウスの定義はひとまず、「ドミトリーと呼ばれる相部屋制度」を設け「洗面所・シャワー・トイレは共用」、また、「素泊まり」を基本として食事付きのプランはなく、代わりに「宿泊者同士で食事を共有しおしゃべりしたりできるようなスペース」がある、といった遠山郷の他旅館とは宿泊経営上の区別をして用いる。

### 2. ゲストハウス「太陽堂」の経営実態と特徴

本稿をまとめるにあたっては、水戸幸恵氏（以下、太陽堂オーナー）へのインタビューと学輪IIDA「遠山郷エコ・ジオパークフィールドスタディ」（以下、遠山郷EG-FS）<sup>1)</sup>の成果を参考にする。

はじめに、インタビュー調査を通して明らかとなった経営実態を示す。インタビュー調査は2021年11月14、15日、12月19日、2022年8月7日、11日に実施した。調査の一例として、経営者として交流の場を創り出す上での工夫、地域行事への参加状況や所属している組織、他にも、新型コロナウイルス感染症による影響や対策について聞き取りを行った。

#### 2.1 太陽堂の概要

太陽堂は、千葉県出身の太陽堂オーナーが、地元の大工や友人に協力してもらいながら、かつて商店だった空き家を改修し、2019年7月に開業したゲストハウスである（図1）。また、太陽堂が立地している和田地区は、歴史をさかのぼると城下町、宿場町である。そのため、ゲストハウスの徒歩圏内には旅館や商店などの商業施設、学校、図書館や公民館などの公共施設が小学校区位の身近な範囲に集まり、歴史情緒を感じられる場所として多くの人に親しまれている。

1階には土間があり、宿泊者だけでなく、宿泊の有無にかかわらず地域住民や地域外の人びとが自由に利用できる。また、洗面所・シャワー・トイレ、自炊可能なキッチンが



図1 太陽堂の外観（2021年11月15日撮影）

ある。

2階にはドミトリーと個室があり、ドミトリーでは2段ベッドが備わり3～4人泊まることができる。相部屋ならではの宿泊者同士の交流が生まれ、ゲストハウス特有の旅の思い出づくりが醍醐味であるといえる。また、宿泊定員数は、ドミトリーが2部屋で7名（うち1部屋は女性専用）、1～3人の個室が2部屋で6名、合わせて最大13名まで宿泊可能である。宿泊料金はドミトリーが1人1泊3,800円、個室は1部屋1泊8,400円である（いずれも税込、2022年8月11日時点）。

宿泊者の推移を見てみると、ゴールデンウィークが重なる5月や7～8月の南アルプス登山シーズンは繁忙期となり、宿泊者数は比較的多い（図2）。また、一般的に冬期は宿泊者数が減少するが、遠山郷の12月は国の重要無形民俗文化財に指定される「遠山の霜月祭り」が行われ宿泊者数が若干多いことが分かる。他にも、部分的にコロナ禍の休業要請等による影響で、宿泊者数の著しい減少が見られる時期がある。

主な宿泊者は、ツーリングや登山といった趣味の中継地点として1泊のみで利用されることが多く、他にも遠山郷や周辺への研究調査のために長期滞在するケースもあるという。また、1度目の来訪で太陽堂や遠山郷を気に入り、その結果リピーターとなり複数回宿泊するだけでなく、且つその場合は連泊するケースが多いという。



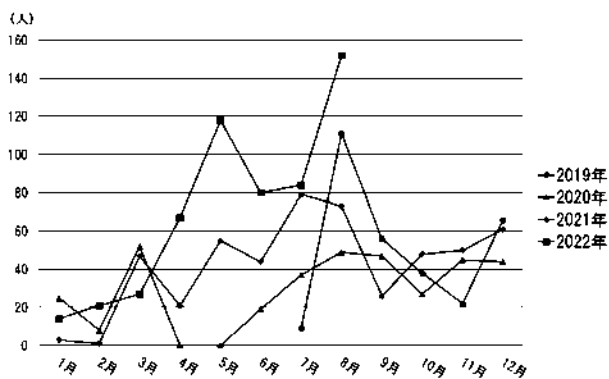


図2 宿泊者の推移

## 2. 2 交流機能

次に、太陽堂内の施設や取組みの特徴を捉え、どのような交流が生まれているのかについて整理する。

### ①共有スペース（地域の勝手口）

太陽堂1階の土間（出入口）には、誰でも利用できる共有スペースとして大きなテーブルがひとつ置かれ、食事をとったり、くつろいだり何をしていても良い自由な空間の中で、多彩な交流が生まれる場所であるといえる（図2）。とりわけ、太陽堂は食事の提供がなく、共有のキッチンを使用して自炊することが基本であるため、宿泊者が共同でキッチンを使用し、夕食の時間を共にすることは日常的な光景となっている。

太陽堂オーナーは、宿のコンセプトとして「いつも開いていて誰かがいる生活が見える場所、旅人もまちの人も色々な人が出入りする遠山郷の『勝手口』」と決め、宿泊者と地域住民との交流が生まれやすい場所を意図的に創り出している。そして、太陽堂オーナーが会話の中心となって宿泊者同士や地域住民を巻き込み、時にはその場を盛り上げることで、誰もが気軽に楽しめる場所といえる。



図3 1階の共有スペース（2021年11月15日撮影）

### ②カフェ&バル

太陽堂の取組みのひとつとして、カフェは土日休みの昼間に一般営業し、コーヒーやお茶、クリームソーダ等の飲み物を1階の共有スペースで提供し、誰でも利用することができる（図4）。バルは宿泊者がいるとき限定で酒類や軽食を提供し、地域住民も利用することができる。なお、近所に住む小中学生がゲストハウスに集まりカフェを利用しており、このことは地域における役割と可能性を探る上で重要なこととして強調しておきたい。



図4 宿泊者と地域住民の交流（太陽堂提供）

### ③カッテ食堂

もうひとつの特徴的な取組みは、1階の共有スペース（地域の勝手口）を利用して、宿泊者や地域住民が料理体験を通して仲良くふれあう場づくりであるといえる（図5）。例えば、遠山郷出身のパティシエ志望の若者が参加して料理の腕を磨くなど、個別具体的なケースとはいえ、ゲストハウスには教育的機能が備わっており、地域内の人材育成の役割を果たしていると考えられる。



図5 不定期で開催される限定イベント（太陽堂提供）

## 2.3 地域との関わり

最後に、太陽堂オーナーが所属している主な組織と活動目的・内容を整理する。

太陽堂オーナーは、「地域が衰弱すれば、ゲストハウスの経営もできない。そのため、経営とはかけ離れていると思われる活動にも積極的に参加したい」と地域づくりへの参加意欲を話す。ここでは、太陽堂オーナーは地域住民として組織への加入をためらわず、移住・定住促進や地域活性化に向けた行事への積極的関与が見られることを強調しておきたい。

### ①和田宿にぎやかし隊

2018年に発足し、太陽堂が立地する和田地区の商店街の店主や地元小学校の校長先生が主な構成メンバーとなり、学校支援や移住・定住促進を通じて持続可能な地域づくりを目指した様々な事業を展開している。太陽堂は共有スペースで企画会議を行うなど、事務局機能を備えた活動拠点となっている。

活動内容の具体例として、商店街における街道縁日の企画運営を行い、地元高校生と共にハロウィンイベントを実施したという。また、「遠山郷を旅する人のための羅針盤のような情報サイト」をコンセプトに、秋葉街道和田宿プラットフォーム「ワダパゴス」の管理運営を行い、ホームページには遠山郷の人や暮らしの雰囲気が味わうことができる内容で溢れている（図6）。特にコンテンツのひとつ「ワダパゴス日記」では、地域行事や学校行事に関する記事を通して遠山郷の魅力を存分に感じ取ることができるので是非一読いただきたい。



図6 ホームページ「ワダパゴス」  
<https://wadapagos.com/> (2022年9月30日最終閲覧)

### ②南信濃1500委員会

遠山郷の人口減少・少子高齢化が著しく進行する中で、定期的に移住・定住促進等を検討するための組織として2021年に発足した。メンバーは和田宿にぎやかし隊に加え、学校の教員やPTA会長を含めた学校関係者、教育委員会などで構成する。なお、組織名には「現在1200人余の地区人口を1500人が暮らすことのできる土台作りを目指す」という想いが込められている。

重点事業として、やまぎと親子留学<sup>(注2)</sup>や遠山郷移住体験プログラムといった独自の移住・定住促進に取り組む。ゲストハウスは宿泊・活動拠点として活用され、太陽堂オーナーや地域住民との交流を通して遠山郷の暮らしを体験することができる。また、太陽堂オーナーは、移住体験プログラムの連絡窓口となり、移住希望者からの相談を受けるなど、移住経験者として重要な役割を果たしているといえる。

### ③かぐらの湯応援団

日帰り温泉施設「かぐらの湯」は、全国的にも珍しい高濃度の塩化物天然温泉で、南信州全体における主要な観光地のひとつである。歩いて立ち寄ることのできる大型公衆浴場は、太陽堂だけでなく和田地区の宿泊施設にとって遠山郷再訪の動機に繋がるなど経営上重要な周辺施設といえる。しかし、現在、運営主体の撤退・解散、源泉ポンプの故障による温泉供給の停止、新型コロナによる業績悪化などを理由に休業している（2022年4月30日現在）。

こうした今日的状況の中、かぐらの湯を復興するべく立ち上げられたこの組織は、周辺の芝生の整備やテント市等での物販によるにぎわいの創出を行うなど、様々な行事の企画運営に携わり、太陽堂オーナーも参画する。現在は、かぐらの湯を含む道の駅の方向性を考える「道の駅遠山郷あり方検討会議」を始めており、今後の動向を注視していきたい。

## 2.4 小括

はじめに、太陽堂では、主にツーリングや登山を観光動機とした利用者層が多いものの、長期的な収益性を考えれば、リピーター化や長期滞在・連泊に繋げることがいまひとつの課題としてある。また、12月には霜月祭りに合わせて一定の宿泊者数を確保できることが、遠山郷における宿泊経営上の特徴として捉えることができる。他にも、2019年7月の開業以降、コロナ禍による休業要請等で通常通りに営業できた年はなく、宿泊者数が極端に減少している時期が見られる。

次に、太陽堂の共有スペースは、地域住民が気軽に利用でき、宿泊者と繋がるきっかけづくりに適している。あらかじめ約束があるような予定されたケースだけでなく、太陽堂に立ち寄った初対面の地域住民と宿泊者がある場で飲



表1 フィールドスタディ（2019-2022）のテーマ・情報提供者・参加者の概要（観光テーマを抜粋）

実地日	テーマ	情報提供者	参加大学／高校【参加者数】
2019年度 9/14-16	観光「あんばまいか！一人と人をつなぐツーリズム」	菅原慎一さん（遠山郷観光協会）、水戸幸恵さん（地域おこし協力隊）、遠山典宏さん（コンパスハウス）	東京農工・院【1】、松本【2】、飯田 OIDE 長姫【1】、飯田女子【2】
2020年度 9/14-16	自然の恵みと人の営み「遠山であんばまいかー繋がりが生むマイクロツーリズム」	水戸幸恵さん（ゲストハウス「太陽堂」）、遠山典宏さん（コンパスハウス）	東京農工【1】、松本【2】、飯田 OIDE 長姫【4】、下伊那農業【1】
2021年度 9/18-20	若者・UI ターン者	伊藤誠智さん・西森皇謙さん（遠山郷探検隊）、水戸幸恵さん（ゲストハウス「太陽堂」）	東京農工【2】、松本【1】、立教【1】、飯田【2】、飯田女子【2】
2022年度 9/17-19	観光産業	伊藤誠智さん（遠山郷探検隊）、水戸幸恵さん（ゲストハウス「太陽堂」）	松本【2】、下伊那農業【2】

食を共にするといった偶発的な出会いも多く生まれているという。とりわけカッテ食堂の取組みは、宿泊者や地域住民の趣味や特技を生かすことのできる創発的な学びあいを促す場になっていることは特筆しておく。

最後に、太陽堂は食事提供がなく個別のベッドメイクを必要としないため、遠山郷の他旅館と比べて地域行事に関わる時間の確保がしやすいと考える。その意味では、宿泊施設を生かした移住・定住促進の取組みは、太陽堂だからこそ可能で、且つ地域との特徴的な関わり方であるといえ、さらに地域への貢献度は高いと思われる。小規模宿泊施設における経営上の特徴と地域連携・貢献活動の関連性についての検討は今後の課題としたい。

### 3. 学輪IIDA遠山郷EG-FSの成果

本節では、遠山郷EG-FSの主要テーマである「観光と人の営み」に注目して、これまでの成果物（参加者レポート、調査報告書や発表会スライド資料）を参考に、地域における太陽堂の役割と可能性を掘り下げてみたい。なお、太陽堂オーナーへのインタビューは2019年から2022年現在までの4年間継続的に行っている（表1）。

#### 3.1 観光をテーマとした遠山郷EG-FSの概要

観光分野における遠山郷の特徴は、飯田市内にリニア中央新幹線駅や三遠南信自動車道が建設・整備される中で、交流人口の急速な増加が予測され、地域経済の振興に大きな期待が持たれていることであろう。しかしその一方で、騒音や排出ガスによる環境負荷の増大などが考えられ、とりわけエコ・ジオパークサイト<sup>(注3)</sup>においては、自然環境の悪化や生活の侵害、過度な商業化を避けながら観光需要喚起策を進めるといった、自然保護・保全の観点も忘れてはならない。また、個別具体的なケースではあるものの、遠山郷の観光を考える上で、かぐらの湯の復興が焦眉の課

題としてあり、経営管理の実態や地域経済・社会へのインパクトについては田開・片井（2022）を参照されたい。

このような今日的状況の中で、遠山郷の自然が織りなす景観や地形などを最大限生かして、自然体験活動（ラフティング、沢登り、バードウォッチング等）のガイド業を営むなど、Uターン・Iターン就職する若者が増えていることは強調しておきたい。遠山郷EG-FSにおいても、「遠山郷の自然を活かした魅力的な地域づくり」や「若者の移住・定住」をテーマに調査研究を進めているところである。

では、遠山郷EG-FSの当日の動きを見てみると、1日目は、参加学生・高校生同士で遠山郷における「観光」のイメージや問題関心を共有した上で、具体的な調査計画を立てていく。2日目は、自らの足で地域に入り課題を見つけるなど五感を使ったフィールドワークを大切に、太陽堂オーナーをはじめ地域のキーパーソンへのインタビューを行う。3日目は、観察して収集した情報を基に、大判サイズの地図や模造紙に調査成果をまとめて発表し、地域側からの質疑応答やコメントを受け付ける。

参加者の問題関心の一例として、「地域におけるゲストハウスの役割は何か」をはじめ、「自然がもたらす恵みや地域資源を活かしてどのような観光地を創り、それらをどのようなカタチで地域住民や観光客に知らせていくか」、とある。また、「自然資源を生かした観光誘致の方法」、そもそも「遠山郷にとっての自然とは何か」、「自然との共生を象徴するものは何か」、と自然と共に生活することへの興味がうかがえる。さらに、「遠山郷に移住してよかったこと」、「どのように地域に馴染むか」、「自らが地域に果たす役割は何か」、と移住・定住への関心が高いことが分かる。他にも、「新型コロナウイルス感染症の対策」などの現代的課題にも敏感で、コロナ禍の経験を踏まえて宿泊経営に対する関心の高さがうかがえる。

### 3. 2 調査結果

参加者が作成した『調査報告書』の内容から、これまでの調査結果を概観してみる(表2)。なお、紙幅の関係からすべての調査結果を取り上げることはできず、内容の解釈や記述に関する誤りなどは、筆者らの責任に帰す。

調査報告書には、実際に自分の目で見て感じた印象を含めて、太陽堂オーナーから直接聞いた内容がまとめられる。例えば、2021年度の調査報告書からは、太陽堂は「集まる人を特別扱いせず、すべての人がフラットに楽しめるように心掛け」ており、太陽堂オーナーがいることで「『遠山郷の

表2 調査報告書(テーマ:観光と人の営み)の一部抜粋

<p>太陽のように人々を照らす場所</p> 	<p>2019年度『調査報告書』</p> <p>宿泊施設として2019年7月にオープンした「太陽堂」。ゲストハウスとも呼ばれていて、地元の方との交流の場になっている。この宿泊施設を営んでいるのは、熱い愛の絆で結ばれている水戸さん夫婦がお話をしていて感じる人柄の良さと地域を盛り上げようとする強い思いを持つ方たち。遠山郷を知らない方でもここに来ればこの遠山郷の魅力を知れるはず!!</p> <p>もう一度会いに行きたいと思えるような素敵なゲストハウス「太陽堂」に足を踏み入れてみませんか?</p>
<p>人が集う憩いの宿～ゲストハウス太陽堂</p> 	<p>2021年度『調査報告書』</p> <p>遠山郷和田地区にあるゲストハウス太陽堂。Iターンで遠山に移り住んだ水戸さんが経営している。</p> <p>宿泊施設としての側面だけでなく、ゲストを含め地域の人と交流できる場所にもなっている。定期的で開催されるイベントなどを通して、さまざまな人と交流することができる。</p> <p>店主の水戸さん曰く、集まった人の誰かを特別扱いしたりせず、みんながフラットに会話や交流を楽しめるように心掛けている。</p> <p>住民やゲストが、近い距離感で交流することができる太陽堂があることで、そしてゲストにとって地域への架け橋になっている水戸さんがいることで、ゲストが感じる「遠山郷のあたたかさ」が生まれるのではないだろうか。</p>
<p>遠山の魅力を伝える太陽の女神～水戸幸恵さん</p> 	<p>2021年度『調査報告書』</p> <p>ゲストハウス「太陽堂」の経営者。自然に囲まれた地でゲストハウスを経営したいという夢をかなえるため、友人の紹介で知った遠山郷にIターン移住された。職業にも通じるオープンな姿勢のおかげで、地域にもすぐなじんでいくことができ、いまでは立派な遠山民だ。町を活性化するため、遠山に移住する人を増やす使命を感じており、そのために、町に来てくれる方に遠山は「自分たちの田舎」と感じてもらえるように計らい、遠山のことをよく知ってもらいたい、興味を持ってもらいたいと考えていらっしゃる。人々をひきつける遠山を愛し、より多くの人に広めようとする水戸さんのような方々も、重要な地域の資源といえるかもしれない。</p>
<p>人と人がつながる場所!～ゲストハウス太陽堂～</p> 	<p>2022年度『調査報告書』</p> <p>遠山郷和田地区にあるゲストハウス太陽堂。もともとゲストハウスをしたくて、たまたま遠山郷にきた水戸さん。</p> <p>宿泊施設だけでなく、ゲストさんたちを含めて地域の人と交流できる場所にもなっている。水戸さんもこの地域の人からは信頼されており、遠山の人たちにも溶け込んでいる。遠山郷探検隊の伊藤さんもお客さんの8割は太陽堂からの人たちが来てくれているとっており、地域の横の繋がりで支えあっている。遠山に住んでいくためには地域の人たちとの関りを大切に、信頼関係を結んでいくことが大切。また、地域をよりよいものにしていくためにも自分が何ができるのか、考えることをやめないことが大切と考える。</p>

あたたかさ』が生まれる」(2021年度)、と太陽堂や地域に対するイメージを膨らませる。また、「もう一度会いに行きたいと思えるところ」(2019年度)、太陽堂オーナーは「立派な遠山民」であり「重要な地域の資源」(2021年度)、と太陽堂や人の魅力を肌で感じ取る様子が見える。

また、「地域への架け橋」(2021年度)、「地域の人から信頼され、地域に溶け込む」(2022年度)、と太陽堂と地域との関係性に注目し、ゲストハウスが「憩いの場」としての機能を有していると指摘するだけでなく、地域との「信頼関係」を築くための重要な拠点になっていることを強調する。他にも、アウトドア・アクティビティを提供する遠山郷探検隊(観光関連事業者)との連携協力を通して観光客誘致に取り組むケースが見られるなど、「地域の横のつながりで支えあっている」(2022年度)、とゲストハウスを核に地域経済の活性化に寄与していることが分かる。

次に、『参加者レポート』を通してインタビューの内容を見てみると、太陽堂オーナーは「これからの観光はそこにいる人が観光の目的(資源)になる」(大学生、2019年度)、『『この人に会いたい』という人との繋がりを求めて来て欲しい』(高校生、2019年度)、と話していることが分かる。こうしたインタビューを受けて、「観光地があって美味しい食べ物があることも豊かさだと改めて感じるが、それ以上に人がいることは大切」(高校生、2019年度)、「地域の方とよそ者、子どもと大人、若者と老人、などといった垣根を設けずに、皆がフラットに交流すべき」(大学生、2021年度)、と人との繋がりと交流の重要性を感じる参加者は少なくない。

最後に、太陽堂オーナーは「自然災害が起きても地域の繋がりによる安心感があり、不安や孤独を感じない」(大学生、2020年度)、「遠山に移住する前と比べて不便な点はあるが、それよりも遠山での生活の楽しさが上回っているため全然気にならない」(大学生、2021年度)、と移住や地域に対する素直な思いを話す。さらに、「地域活性化や人を呼ぶことはその土地で商売をする人の役割のひとつ。自分の愛する土地を守っていくという思いを感じた」(高校生、2021年度)、と太陽堂オーナーの固い意志をうかがい知ることができる。

### 3. 3 小括

ゲストハウス「太陽堂」では、「人」が独特の魅力を形成し、改めて「人」こそ最大の観光資源であると認識することができる。何よりも、中山間地域のライフスタイルや価値観に応じた太陽堂オーナーの働き方が宿泊経営に生かされており、それは地域の暮らしや環境に合わせた「適応力」を発揮した地域経営や観光まちづくり等の構築において重要な意味を持つと思われる。また、Uターン・Iターン者による新規参入事業(ここでは遠山郷探検隊)との連携

協力の在り方は注目に値し、太陽堂が今後新たな観光ビジネスを展開させるための拠点となる可能性は大きい。さらに、太陽堂オーナーの地域活動に対する積極的関与は、先述した移住・定住促進における事業への成果に繋がり、そしてその貢献度は高いといえるが、それについての考察は別稿に譲ることにする。これらの点を念頭に置けば、太陽堂オーナー側の宿泊経営や地域に対する意識等を基にゲストハウスの役割を考察するだけでなく、地域側の視点から、観光地における外部人材の受入態勢をどのように整えていくのか等を明らかにすることも重要であると考えられる。

## 4. おわりに

本稿では、長野県飯田市遠山郷(南信濃地区)のゲストハウス「太陽堂」を対象に、宿泊施設の経営実態を把握するとともに、地域における対象ゲストハウスの役割を整理した。経営実態は、ツーリングや登山を目的とした新規宿泊客による利用が中心となり、一方で、太陽堂や遠山郷への愛着を高めることでリピーター化に繋がり、長期的な視点から交流機能の充実が収益の安定化や収益力を生み出す可能性が高いと考えられる。また、太陽堂は宿泊者と地域住民が分け隔てなく交流できる空間を意図的に創り出し、さらに宿泊の有無にかかわらず地域住民や地域外の人びとが自由に出入りできる空間を演出している。そして、太陽堂オーナーが地域に与える影響は大きく、地域への馴染み方や溶け込み方といった「適応力」が地域づくりにおいて重要であることを指摘した。なお、本稿は一部の地域を対象にゲストハウスの経営実態を整理したもので、ここで明らかになった点を一般化するには限界があり、本稿の課題を踏まえたさらなる調査研究が求められる。

最後に、遠山郷における観光分野の研究を進めるため、これまでの調査研究の成果を踏まえてゲストハウスが担う役割を考察し提示を述べ、結びとしたい。

第1に、ゲストハウス経営上の特徴は、「人」自体が観光資源となり、宿泊者や地域住民との「交流」を重視した空間が観光客誘致や観光行動の志向に大きく影響するという点である。例えば、ゲストハウスのオーナーやスタッフが宿泊者と宿泊者、宿泊者と地域住民を思慮深くも積極的に繋ぎ合わせる役割は、海外のホステルとは異なる日本特有の交流の在り方として強調される(林・藤原、2015)。外国人旅行者の受入れに関して言えば、外国人宿泊者が地域内やゲストハウスでの交流に満足して、宿泊延長やリピーター化の効果がみられるだけでなく、地域住民側にも地域価値を再発見するといった社会文化的な効果が得られる(山川ら、2021)。こうしたゲストハウスに関する現象を分析し様々な議論がなされる中で、日本の宿泊施設における交流機能の意義が見出され、インバウンド需要を地域経済に取り込む点や地域活性化などの役割を担う拠点としてゲ



ストハウスが果たす役割は少なくない。

さて、宿泊施設において宿泊ゲストをもてなすのは人（ゲストハウスのオーナーやスタッフ）が重要であることは言うまでもない。一方、ここでの「人」とは、地域に対する地域住民の思いやその背景にあるストーリーを伝えるなど、宿泊者同士または地域を繋ぎコーディネートする役割を担うとともに、地域づくりへの責任感を持ちあらゆる立場の人と「信頼関係」を築いていくことができる「人」を指す。こうした点を念頭に置いて、太陽堂オーナーのライフスタイルに応じた働き方、開業動機や宿泊経営に対する意識の変化等を捉えながら、そのような人材が観光地にもたらすポジティブ／ネガティブな影響や「適応力」に関する考察を加える必要がある。

第2に、地域経済を支える宿泊形態のひとつとしてゲストハウスの動向と発展に注目せざるを得ない。全国のゲストハウスの動向を見てみると、多くの施設で食事の提供をしていないことが分かり（土橋、2020）、そのため、ゲストハウスの宿泊者は食事の際に周辺の商店街を利用し食材を調達するなど、その地域における消費を域内に分散することができる。異なる視点から考えれば、周辺商業施設や他旅館との連携協力の必然性が伴い、宿泊施設をはじめ飲食店や旅行会社などの観光関連産業が一体となって進める対応強化策が重要であるといえる。

何よりも、日本のゲストハウスが台頭した背景には、訪日外国人旅行者の増加に伴う宿泊需要の高まりによる可能性が高いと考えられ（石川、2014）、今後ますますインバウンド需要が高まるゲストハウスにおいて、その存在価値は大きく、地域振興策の幅の広がりが期待される。一方、新型コロナウイルス感染症パンデミックを分岐点にして、インバウンド観光復興施策を進める中で、地域住民の異文化需要意識や危機管理意識の向上を施策方針に取り入れなくてはならない（張、2022）と提言されるように、今後は地域（受入）側に着目した研究が望まれ、その必要性も高まると予想する。

以上、コロナ禍とその後を見据えた大局的な流れを整理したときに、地域における受け入れ態勢や実践は重要な視点となり、地域住民との信頼関係を築き、地域住民の自発性を削ぐことのない方法や受容・協働の在り方に関する研究（竹田・田口、2019など）は新たな研究を展開する上で示唆に富む。さて、飯田市といえば、地域住民が自発的に取り組むまちづくり精神が根付くとともに、飯田市における住民自治の独自性は人づくりを大切にす教育や学習にあり、精力的な公民館活動は全国的にも知られる（注4）。こうしたまちづくりにおける人づくりや学びという文脈に沿って、自ずと遠山郷ではゲストハウスを軸に「教育移住」といった新たな取り組みが成果を上げていると思われ、観光を出発点にあらゆる角度から地域が活性化する過程を明ら

かにしていきたい。

第3に、ゲストハウスを宿泊者や地域住民の学ぶ拠点として捉えることに意義がある。教育機能に関する既往研究として、フンク（2008）は、「学ぶ観光」という観光形態（修学旅行やエコツーリズム）を基盤とした観光地域づくりの方向性を示し、プログラム開発、人材育成や受け入れ態勢などを地域の中で検討する必要性を述べる。また、大島（2016）は、持続可能な観光を構築するために、訪問する地域への社会的なマイナス要因を減らし、地域社会や環境への責任ある言動が伴う観光者になるために、様々な学習機会を地域に作り上げていく必要性を述べる。特にエコツーリズムの発展過程と地域住民の学習の広がり注目した中澤（2021）は、地域住民が自然環境と共生し、住み続けるための地場産業を生み出す学習を通して、地域づくりに対する主体形成が促されることを明らかにしている。

今後は、日本独自の路線で発展を遂げる新しい宿泊形態としてのゲストハウスに着目し、「学び」を基盤とした観光まちづくりの在り方を検討することで、該当分野において新たな知見を与えることができる、と考える。そして、地域における持続可能性を捉えたときに、環境、経済、社会の統合的な視点に立ったESD（Education for Sustainable Developmentの略、持続可能な開発のための教育）の必要性が高まり、地域住民が主体的・創造的に参加する持続可能な地域づくりに果たすESDの役割は、将来にわたってきわめて大きいといえる（阿部、2010）。現在、遠山郷では、ESD化をテーマに「教育」を核とした地域に根差した取り組みが強力に推進され（注5）、一連の動きの中には観光分野においても重要な知見が大いに含まれていると考える。今後、遠山郷の「観光」を支える人づくりや学びの視点が重要となる中で、過去の歴史や自然の中で営まれ、あるいは開発の歴史に立脚して現在があるということを深く理解し、それらを踏まえてこれからの未来を描いていかなければならない。そしてその先に、地域の文脈に基づく魅力的かつ個性的な観光とまちづくりが実現すると考え、観光分野におけるESD研究の必要性が高まるのではないだろうか。

## 注

（注1）学輪IIDAにおける共通カリキュラム「実践科目」として、「エコパーク、ジオパークを舞台に、聞き取り調査や体験活動を行い、地域資源の価値や活用方法について議論する」ことを目的に事業が展開される。大学教員、高校教諭や飯田市美術博物館の学芸員等の有志で企画運営し、複数大学の学生と地元の高校生が参加するという全国的にも珍しい取り組みである。具体的には遠山郷の自然的・文化的資源に関する事前学習（オンラインを併用）、2泊3日の合宿型のフィールドワークを行う。2018年度から2021年度の詳細な報告・評価については、田開（2021）を参照され

たい。

(注2) 自然に囲まれた中山間地に親子で移住し、遠山郷ならではの特色ある教育を受けることができる。また、市が住宅を安価に提供したり、生活助成制度による助成金が支給されたり、さらに保護者の就業先を斡旋したり、家庭菜園等をすすめる生活支援など、プログラムが充実している。

(注3) 飯田市上村・南信濃地区は、ユネスコエコパーク(正式には生物圏保存地域)や日本ジオパークに認定されたエリアが重なり、自然環境を保護し活用できる大事な場所である。

(注4) 飯田市の公民館活動は、公民館に行くのではなく「公民館やる」と表現される。それは「公民館に行く」とか「公民館活動をする」とはわずに、地域住民がごく自然に「公民館をやる」と語られ、公民館を核とした地域活動は、日常生活を送ることそのものであり(牧野、2019)、換言すると地域住民一人ひとりが主役となり、まちづくりへの積極的関与の姿勢が多くみられる状況を指すと考えられる。

(注5) 立教大学ESD研究所は、持続可能な地域づくりの視点からESDに取り組む自治体とネットワークを結び、長野県飯田市を含む4自治体との間でESD地域創生連携協定を締結している(阿部、2020)。具体的には、遠山郷の小中学校に対してESDを通じて統廃合せずに存続させるという市の提案を受けて、幼保・小・中の学校教育をベースとしたアクションリサーチによる支援を行い、延いてはESD地域創生に取り組んでいる(小玉・増田・朝岡、2020)。なお、立教大学ESD研究所と飯田市が連携協定を締結するまでの経過は小玉・朝岡(2018)を参照されたい。

## 引用・参考文献

阿部治(2010)「ESD(持続可能な開発のための教育)とは何か」、『ESDをつくるー地域でひらく未来への教育ー』、生方秀紀・神田房行・大森享編、ミネルヴァ書房、1-27。

阿部治(2020)「自治体におけるESD地域創生拠点形成に関するアクションリサーチ」、『ESDによる地域創生の評価とESD地域創生拠点の形成に関する研究 最終報告書』、立教大学ESD研究所、10-11。

林幸史・藤原武弘(2015)「旅行者が交差する場としてのゲストハウス:交流型ツーリズムの社会心理学的研究」、『関西学院大学社会学部紀要』、120、79-87。

石川美澄(2014)「国内におけるゲストハウス台頭の社会背景に関する考察ー質問紙調査を基にー」、『日本国際観光学会論文集』、21、99-104。

フンク・カロリン(2008)「『学ぶ観光』と地域における知識創造」、『地理科学』、63(3)、160-173。

小玉敏也・朝岡幸彦(2018)「長野県飯田市との連携協定の締結による研究活動報告」、『ESD地域創生拠点形成に関する研究(2017年度成果報告書)』、立教大学ESD研究所、132-139。

小玉敏也・増田直広・朝岡幸彦(2020)「飯田市におけるESD地域創生拠点形成」、『ESDによる地域創生の評価とESD地域創生拠点の形成に関する研究 最終報告書』、立教大学ESD研究所、12-29。

牧野篤(2019)『公民館をどう実践してゆくのー小さな社会をたくさんつくる・2』東京大学出版会

中澤朋代(2021)「エコツーリズムにおける地域づくりに向けた住民の主体形成ー沖縄県東村を事例にー」、『環境教育』、31(1)、13-22。

大島順子(2016)「観光の教育力の構造化に向けて」、『琉球大学大学院観光科学研究科』、8、73-86。

田開寛太郎(2021)「『遠山郷エコ・ジオパークフィールドスタディ』実践報告」、『学輪』、9、17-24。

田開寛太郎・片井武瑠(2022)「中山間地域における公衆浴場の経営と利用実態に関する研究ー長野県飯田市遠山郷かぐらの湯を事例にー」、『松本大学地域総合研究』、23(1)、17-34。

竹田晴香・田口太郎(2019)「中山間地域における外部人材の役割変化と地域の受容・協働プロセスに関する研究ー岡山県美作市上山地区の地域おこし協力隊を事例にー」、『農村計画学会誌』、38(Special\_Issue)、273-282。

土橋明(2020)「我が国におけるゲストハウスの実態調査に関する一考察」、『北海学園大学経営論集』、17(4)、219-230。

山川拓也・中尾公一(2021)「地域住民と外国人宿泊客を結びつけるゲストハウスー媒介・仲介機能とCOVID-19の影響の分析ー」、『観光研究』、32(2)、81-93。

張明軍(2022)「地方における住民参加型インバウンド観光研究の動向ー新型コロナウイルス感染症パンデミックを分岐点にしてー」、『福知山公立大学研究紀要』、121-152。

## 謝辞

本研究の遂行におきましては、聞き取り調査にご協力頂きましたゲストハウス太陽堂の水戸幸恵氏、水戸嘉嗣氏、飯田市の職員の方々に、この場を借りて感謝申し上げます。コロナ禍にも関わらず何度も聞き取りに応じていただき、メールや電話でも随時連絡を取らせて頂きました。





# 大学連携会議「学輪IIDA」の趣旨とこれまでの歩み

## 【学輪IIDAの趣旨】

大学連携会議「学輪IIDA」は、飯田に価値や関心を有する大学研究者のネットワーク組織です。

飯田と大学との1対1の関係から、飯田を起点に様々な大学研究者が相互につながる有機的なネットワークを形成するため、平成23年1月に設立されました。

学輪IIDAのコンセプトは、「21世紀型の新しいアカデミーの機能や場づくり」です。大学研究者同士が相互に知り合い親睦を深めながら、モデル的な研究や取組を地域とともに行っていこうとする試みです。大学研究者の有機的なネットワークの形成を通じて、大学の専門的な知見や人材を地域に呼び込み、これまで飯田が培ってきた経験や取組と融合することで、地域の課題解決や付加価値を高めていくような新しい形の大学的な機能の構築を追求していく挑戦でもあります。

学輪IIDAは、役職や規約などの無い緩やかな（平らな）ネットワーク組織です。共通のキーワードは「飯田」であり、大学研究者による「ボトムアップ」で「ボランタリー」な活動を基本としています。設立当初19大学43名だった大学研究者の参画も、これまでの様々な活動を通じて、令和4年12月末日現在では73大学・機関、141名もの大学研究者が参画するまでに至り、ネットワークの輪が広がってきています。

学輪IIDAの知のネットワークを通じて、「地域（内部）の知」と「大学（外部）の知」が融合する「共創の場」を創出し、持続可能性を追求する地域として、様々なモデル的な取組を多様な主体の連携と協働のもと進めていきます。

## 【学輪IIDAのこれまでの主な取組】

### 1 大学連携会議「学輪IIDA」の設立

（平成23年1月29日～30日）

飯田と関係の深い大学研究者が一堂に会し、今後の方策等について検討するため「大学連携会議」を開催した。会議の名称を「学輪IIDA」とし、様々な提案、課題等の中から、現実的なもの、実施可能なものを抽出し、具体的な行動を起こしていくため「プロジェクト会議」を設置していくことを確認した。

### 2 大学連携会議「学輪IIDA」全体会

学輪IIDA全体会は、年に一度学輪IIDAメンバーが飯田に会し、大学連携や学輪IIDAの取組に関する情報の共有、学輪IIDAの今後のあり方や具体的な取組に関する検討及び学輪IIDAの取組を市民など多くの方知ってもらうこ

となどを目的に開催するもの。

例年、1月下旬の土日2日間で開催しており、土曜日は誰でも参加可能な「公開セッション」を、日曜日は学輪IIDAメンバーによる「内部討議」を開催している。

#### ○平成23年度学輪IIDA全体会

（平成24年1月28日～29日）

学輪IIDA全体会「公開セッション」を初めて開催した。初回開催のため、参加研究者による自身の専門領域や飯田との関わり、関心事項などに関するプレゼンテーションを行った。

「内部討議」では、学輪IIDAプロジェクト会議やウェブサイトの構築など、今後の取組に関する検討を行った。2日間で、17大学31名のメンバーが参加した。

#### ○平成24年度学輪IIDA全体会

（平成25年1月26日～27日）

「公開セッション」では、大学の実践事例報告会、学輪IIDAプロジェクト会議の活動報告、及び地域と大学との連携による地域づくりの可能性をテーマにしたパネルディスカッションを開催した。

[大学の実践事例報告会]

#### ①豊橋技術科学大学シャレットワークショップ

豊橋技術科学大学 大貝 彰 教授

#### ②デジタルプラネタリウム共同プロジェクト

和歌山大学 尾久土 正己 教授

#### ③参加型地域社会開発（PLSD）研修

日本福祉大学 大濱 裕 准教授

[学輪IIDAプロジェクト会議報告]

#### ①共通カリキュラム構築プロジェクト会議

立命館大学 平岡 和久 教授

#### ②飯田工業高校後利用プロジェクト会議

追手門学院大学 小畑 力人 教授

[パネルディスカッション]

テーマ：地域と大学との連携による地域づくりの可能性について

コーディネーター：飯田市長 牧野 光朗

パネリスト：

東京農工大学大学院農学研究院

朝岡 幸彦 教授

飯田女子短期大学 高松 和子 教授

南信州・飯田フィールドスタディ講師

桑原 利彦 氏

「内部討議」では、学輪IIDAプロジェクト会議の今後の取組や、旧飯田工業高校後利用に関する将来展望や具体的

な整備などについて意見交換した。2日間で、18大学33名のメンバーが参加した。

#### ○平成25年度学輪IIDA全体会

(平成26年1月25日～26日)

「公開セッション」では、大学の実践事例報告会、学輪IIDAプロジェクト会議の活動報告、及び「学びの場 飯田」の魅力や可能性をテーマにしたパネルディスカッションを開催した。

[大学の実践事例報告会]

- ①地域社会システム調査実習  
東京農工大学 朝岡 幸彦 教授
- ②法政大学西澤ゼミフィールドワークの取組  
法政大学 西澤 栄一郎 教授

[学輪IIDAプロジェクト会議報告]

- ①共通カリキュラム構築プロジェクト会議  
立命館大学 平岡 和久 教授
- ②飯田における伝統工芸の活性化に向けた調査報告  
京都外国語大学 高島 知佐子 講師
- ③飯田工業高校後利用プロジェクト会議  
追手門学院大学 小畑 力人 教授
- ④知のネットワークを活用した人材育成に向けた取組  
法政大学 高柳 俊男 教授

[パネルディスカッション]

テーマ：「学びの場 飯田」の魅力や可能性について

コーディネーター：飯田市長 牧野 光朗

パネリスト：

- 法政大学人間環境学部 石神 隆 教授
- 豊橋技術科学大学建築・都市システム学系  
大貝 彰 教授
- 東京大学大学院教育研究科 牧野 篤 教授

「内部討議」では、各研究者の感じる飯田の価値・魅力・可能性に関する意見交換、学輪IIDAやプロジェクト会議の今後の取組及び学輪IIDA紀要作成に向けた意見交換などを行った。2日間で、17大学32名のメンバーが参加した。

#### ○平成26年度学輪IIDA全体会

(平成27年1月24日～25日)

「公開セッション」では、大学の実践事例報告会、学輪IIDAプロジェクト会議の活動報告、及び右肩下がり時代における持続可能な地域の実現をテーマにしたパネルディスカッションを開催した。

[大学の実践事例報告会]

- ①法政大学国内スタディージャパン研修  
法政大学 高柳 俊男 教授
- ②グローバルシティ・飯田における多文化共生  
上智大学 蘭 信三 教授  
宮崎産業経営大学 福本 拓 准教授

[学輪IIDAプロジェクト会議報告]

- ①共通カリキュラム構築プロジェクト会議  
和歌山大学 藤田 武弘 教授  
立命館大学 平岡 和久 教授

[パネルディスカッション]

テーマ：地方消滅時代における飯田下伊那

－右肩下がり時代における持続可能な地域の実現のために－

コーディネーター：

しんきん南信州地域研究所 林 郁夫 所長

パネリスト：

- 首都大学東京教養学部 大杉 覚 教授
- 立命館大学政策科学部 森 裕之 教授
- 京都大学大学院経済学研究科 諸富 徹 教授

「内部討議」では、旧飯田工業高校後利用に関する検討、学輪IIDAやプロジェクト会議の今後の取組、及び学輪IIDA機関誌作成に向けた意見交換などを行った。2日間で、21大学38名のメンバーが参加した。

#### ○平成27年度学輪IIDA全体会

(平成28年1月23日～24日)

「公開セッション」では、大学の実践事例報告会、学輪IIDAプロジェクト会議の活動報告、及び「真の地方創生」の実現に向けた学輪IIDAの意義とこれからの可能性をテーマにしたパネルディスカッションを開催した。

[大学の実践事例報告会]

飯田水引プロジェクトの取組について

法政大学 酒井 理 准教授、ゼミ生

[学輪IIDAプロジェクト会議報告]

- 共通カリキュラム構築プロジェクト会議  
東洋大学 小林 正夫 教授

[パネルディスカッション]

テーマ：「真の地方創生」の実現に向けた学輪IIDAの意義とこれからの可能性

コーディネーター：

法政大学人間環境学部 石神 隆 教授

パネリスト：

- 立命館大学政策科学部 平岡 和久 教授
- 東京大学大学院工学系研究科  
瀬田 史彦 准教授
- 一般財団法人日本経済研究所  
大西 達也 調査局長

コメンテーター：飯田市長 牧野 光朗

「内部討議」では、旧飯田工業高校利活用構想案に関する説明、学輪IIDAの活動を支える知の拠点のあり方、学輪IIDAの今後の取組に関する意見交換などを行った。2日間で、20大学32名のメンバーが参加した。

## ○平成28年度学輪IIDA全体会

(平成29年1月21日～22日)

「公開セッション」では、大学の実践事例報告会、学輪IIDAプロジェクト会議の活動報告、信州大学航空機システム共同研究講座の開講についての報告及び「様々な「知」や「人財」が共鳴して集う地域の実現に向けて」をテーマにしたパネルディスカッションを開催した。

[大学の実践事例報告会]

飯田水引プロジェクトの取組について

法政大学 酒井 理 准教授、ゼミ生

飯田OIDE長姫高校商業科

[学輪IIDAプロジェクト会議報告]

共通カリキュラム構築プロジェクト会議

立命館大学 平岡 和久 教授

[信州大学航空機システム共同研究講座報告]

信州大学航空機システム共同研究講座の開講について

信州大学 柳原 正明 特任教授

[パネルディスカッション]

テーマ：様々な「知」や「人財」が共鳴して集う

地域の実現に向けて

コーディネーター：

法政大学人間環境学部 石神 隆 教授

パネリスト：

名城大学副学長 都市情報学部

福島 茂 教授

和歌山大学観光学部長 観光学部

藤田 武弘 教授

京都外国語大学外国語学部

堀口 朋亨 准教授

コメンテーター：飯田市長 牧野 光朗

「内部討議」では、旧飯田工業高校利活用に関する説明、意見交換、学輪IIDAの今後の取組に関する意見交換などを行った。2日間で、24大学42名のメンバーが参加した。

## ○平成29年度学輪IIDA全体会

(平成30年1月20日～21日)

「公開セッション」では、大学の実践事例報告会、学輪IIDAプロジェクト会議の活動報告、高等学校による活動紹介及び「イノベーションが起こる地域社会創造を目指して」をテーマにしたフリーディスカッションを開催した。

[基調報告Ⅰ 学輪IIDA実践事例]

①飯田市を基盤とした地域社会と教育の結びつき

～LBS JAPAN TREK 2017 IN IIDA CITYを

事例として～

京都外国語大学 堀口 朋亨 准教授、学生

②学輪IIDA共通カリキュラム構築プロジェクトの取組

静岡文化芸術大学 高島 知佐子 准教授

[基調報告Ⅱ 活動紹介]

地域人教育の取り組みについて

飯田OIDE長姫高等学校 Sturdyegg

[フリーディスカッション]

ファシリテーター：立命館大学 平岡 和久 教授

議論提起：法政大学 石神 隆 教授

フリーディスカッション（自由討議）：会場参加者

「内部討議」では、「産業振興と人材育成の拠点」活用に関する説明、意見交換、学輪IIDAの今後の取組に関する情報共有などを行った。2日間で、26大学46名のメンバーが参加した。

## ○平成30年度学輪IIDA全体会

(平成31年1月26日～27日)

「公開セッション」では、高等学校による活動紹介、大学連携の事例報告、学輪IIDAプロジェクト会議の活動報告及び「知のネットワークの活用による地域人財育成の可能性について」をテーマにした全体討議を開催した。

[高校の活動紹介]

En e - 1 G P S U Z U K Aの取り組みについて

飯田OIDE長姫高校原動機部

[大学連携の事例報告《ポスターセッション》]

[全体討議]

テーマ：知のネットワークの活用による地域人財育成の可能性について

ファシリテーター：和歌山大学 藤田 武弘 教授

事例報告：立命館大学 平岡 和久 教授

名城大学 福島 茂 教授

松本大学 田開 寛太郎 専任講師

飯田OIDE長姫高校

下伊那農業高校

飯田女子高校

フリーディスカッション（自由討議）：会場参加者

「内部討議」では、産業振興と人材育成の拠点（エス・バード）、飯田市域学連携交流施設の視察と活用に関する情報共有、学輪IIDAの取組や新たな連携事業の可能性に関する意見交換、情報共有などを行った。2日間で、26大学36名のメンバーが参加した。

## ○令和元年度学輪IIDA全体会

(令和2年1月25日～26日)

「公開セッション」では、学輪インターユニバーシティオープンキャンパス、学輪IIDA 高大連携の取組報告、信州大学の活動紹介及び「知のネットワーク活用による真の地方創生実現に向けて」をテーマにしたパネルディスカッションを開催した。

[学輪インターユニバーシティオープンキャンパスイベント]

実施内容の詳細は、後述。



#### [高大連携の取組報告]

学輪IIDA共通カリキュラムフィールドスタディ 2019  
について

立命館大学 平岡 和久 教授  
和歌山大学 藤田 武弘 教授

参加高校生からの報告

飯田OIDE長姫高校

下伊那農業高校

飯田女子高校

飯田OIDE長姫高校商業科 國松 秋穂 教諭

#### [全体討議]

テーマ：知のネットワーク活用による真の地方創生  
実現に向けて

～「知」を創造し、「知」がひとを呼び、  
発展する「まち」のカタチ～

コーディネーター：

東京家政学院大学 廣江 彰 学長

パネリスト：

豊橋技術科学大学 井上 隆信 副学長

和歌山大学 藤田 武弘 教授

南信州・飯田産業センター

萩本 範文 専務理事

「内部討議」では、学輪IIDAの取組や新たな連携事業の可能性に関する意見交換、情報共有などを行った。2日間で、30大学38名のメンバーが参加した。

#### ○令和2年度学輪IIDA全体会

(令和3年1月23日～24日)

「公開セッション」では、10周年記念セッションとして「知のネットワークへの挑戦～新時代における持続可能な地域づくりを目指して～学輪IIDA. NEXT10」をテーマにしたディスカッションを開催した。

#### [10周年記念セッション]

テーマ：知のネットワークへの挑戦 ～新時代における持続可能な地域づくりを目指して～  
学輪IIDA. NEXT10

コーディネーター：法政大学 石神 隆 名誉教授

発言者：東京農工大学農学研究院 朝岡 幸彦 教授  
日本観光ホスピタリティ教育学会

小畑 力人 会長

法政大学国際文化学部 高柳 俊男 教授

立命館大学政策科学部 平岡 和久 教授

和歌山大学観光学部 藤田 武弘 教授

[学輪インターユニバーシティオープンキャンパス

「飯田学輪大学」]

実施内容の詳細は、後述

「内部討議」では、学輪IIDAの取組や新たな連携事業の可能性に関する意見交換、情報共有などを行った。2日間で、24大学30名のメンバーが参加した。

で、24大学30名のメンバーが参加した。

#### ○令和3年度学輪IIDA全体会

(令和4年1月22日～23日)

「公開セッション」では、「つながること、学びあうことの可能性 ～コロナから再興し、私たちの地域の未来を創る～」をテーマにしたパネルディスカッションを開催した。

[パネルディスカッション]

テーマ：つながること、学びあうことの可能性

～コロナから再興し、私たちの地域の未来を創る～

コーディネーター：

関西大学 草郷 孝好 教授

パネリスト：立教大学 阿部 治 名誉教授

飯田市南信濃公民館 宮田 浩司 主事

飯田女子高校 福田 真澄 教諭

飯田市美術博物館 四方 圭一郎 学芸員

[学輪インターユニバーシティオープンキャンパス

「飯田学輪大学」]

実施内容の詳細は、後述

「内部討議」では、これからの学びや人材育成と学輪IIDAの展開に関する意見交換、情報共有などを行った。

2日間で、25大学31名のメンバーが参加した。

#### 3 学輪IIDAプロジェクト会議の設立

(平成23年3月23日)

平成23年1月の大学連携会議において確認された提案、課題、意見等を踏まえ、今後実現可能な取組等について議論し、具体的な方向性を見出すことを目的に開催した。

学輪IIDAにプロジェクト会議を設置し、旧飯田工業高校の利活用、地域課題にテーマにした共同研究の実施、学輪IIDAウェブサイトの構築などに取り組んでいくことを確認した。

#### ○旧飯田工業高校後利用プロジェクト会議の設立

(平成23年9月12日)

旧飯田工業高校の「教育施設としての活用可能性」について、様々な角度から検討することを目的に設置された。南信州・飯田フィールドスタディなど現在の大学連携の取組からの積み上げと、リニア時代を意識した大学的な機能の2つの視点で検討していくことを確認した。

プロジェクト会議の詳細については、学輪IIDA機関誌「学輪」創刊号における「飯田工業高校後利用プロジェクト報告」(追手門学院大学社会学部・小畑力人教授)を参照。

旧飯田工業高校後利用プロジェクト会議の主な取組(歩み)は、以下のとおり。

(平成23年度)

プロジェクト会議を設立するとともに、大学院大学の

設置可能性検討に向け、岐阜情報科学芸術大学院大学を視察した。また、プロジェクト会議の趣旨や検討状況について、学輪IIDA全体会公開セッションで報告するとともに、内部討議にて今後の取組について意見交換した。  
(平成24年度)

旧飯田工業高校の教育的な施設の活用の可能性について検討した。旧飯田工業高校の後利用検討に向けては、「飯田で何を学ぶのか」といった理念やコンセプトの検討が重要であること、その理念やコンセプトを実現に向け教育目的の達成に必要なカリキュラムの構築が必要であること、及びその教育を実践するために必要な施設の有効な活用について検討することが重要であることが確認された。

また、リニアを活かした大学的な機能の視点として、共同教育課程、連合大学院、大学院大学の設置可能性などについて調査、研究していくこととした。

(平成25年度)

旧飯田工業高校施設が、目指すべき地域像の実現に向けた地域振興や人材育成の拠点となることが重要であるとの認識のもと、その役割を担うことができる教育・研究施設(機関)としての活用可能性について検討した。旧飯田工業高校を活用した教育・研究施設(機関)には、新しい価値を創発していく機能(価値創発機能)や新しい形の大学機能が必要であるとの認識のもと、様々な人材、知識、経験、情報等が交差する「ナレッジ・スクエア」構想と、その活動に必要なとされる施設のあり方について整理した。また、ナレッジ・スクエアとしての活用や実践を経て、将来的には高等教育機関(大学院大学)やコンベンション施設の設置可能性について検討した。

(平成26年度)

旧飯田工業高校を活用したナレッジ・スクエア構想について引き続き検討した。また、飯田市が実施した「大学院大学設置可能性調査事業」の一環で開催した「南信州における高等教育機関のあり方について考える」シンポジウムにおいて、旧飯田工業高校を研究教育施設として活用する具体案としてナレッジ・スクエア構想と大学院大学の設置可能性について発信した。

(平成27年度)

旧学校施設を活用した類似施設の調査として、「三鷹ネットワーク大学」と「IID世田谷ものづくり学校」の視察を行い、地域との親和性、学校施設を使用することの意義、施設運営には多様な主体の積極的な関わりが重要であること等を確認した。

また、学輪IIDA全体会内部討議にて、南信州広域連合を中心に検討してきた旧飯田工業高校利活用構想案「産業振興と地域振興に寄与する学術研究の知の拠点整備構想案」の考え方と、プロジェクト会議にて導き出した「ナ

レッジ・スクエア構想」の考え方の親和性を確認するとともに、これまでのプロジェクト会議を引き継ぎ、知の拠点形成に向け検討するプロジェクト会議を設置することを確認した。

#### ○知の拠点プロジェクト会議の設立

(第1回プロジェクト会議：平成28年3月5日)

第2回プロジェクト会議：平成28年10月8日)

旧飯田工業高校施設を活用した知の拠点の形成に向け、学輪IIDAに有志メンバーによる「知の拠点プロジェクト会議」を設立した。

第1回プロジェクト会議では、知の拠点の全体像、知の拠点の機能を高める「共創の場」、地域振興の知の拠点や大学サテライト・研究室のあり方などを中心に意見交換した。またプロジェクト会議として、知の拠点の目指す姿やその実現に向け、引き続き情報等共有しながら検討を進めていくこと、リニア時代を見据えこの地域にどのような知の拠点が必要であり、そこで如何にして魅力を形成し人財を引き寄せる磁力を形成し発信していくかなど、本質的な議論を進めていくことを確認した。

第2回プロジェクト会議では、第1回プロジェクト会議以降の旧飯田工業高校施設の利活用に関する検討経過や、施設所有者である県の方針決定や南信州広域連合の方針内容について説明するとともに、知の拠点の重要な機能を担う共創の場のあり方等について意見交換した。

#### ○共通カリキュラム構築プロジェクト会議の設立

(平成23年10月4日)

飯田に関わってきた大学研究者が有する飯田の価値を集約し、共有化した「モデルカリキュラム」の作成と実践を通じて、飯田を起点とした複数大学による新たな連携モデルを構築することを目的にプロジェクト会議を設置し、共通カリキュラムの基本的な考え方や今後の取組について検討、確認した。

共通カリキュラム構築プロジェクト会議の詳細については、学輪IIDA機関誌「学輪」創刊号における「学輪IIDA共通カリキュラム構築プロジェクトの到達点と課題」(立命館大学 平岡和久教授)を参照。

共通カリキュラム構築プロジェクト会議の主な取組(歩み)は以下のとおり。

(平成23年度)

#### ●プロジェクトメンバーによるシラバス案の作成と学習会

プロジェクトメンバーが有している飯田の価値、関心事項を取り入れたシラバス案を作成。12月11日～12日にプロジェクト会議を開催し、各教員が作成したシラバス案の確認や学習会を開催する。

今後、シラバス案を元にしたモデルカリキュラムの作成と実践を、複数大学が連携しながら取り組んでいく方向性を確認した。

(平成24年度)

#### ●南信州ソーシャルキャピタル・フィールドスタディの実施

立命館大学、名城大学、和歌山大学、しんきん南信州地域研究所及び市が連携し、大学の専門性と飯田でのフィールドスタディを組み合わせたモデルカリキュラム作成と実践に向け取り組んだ。地域の持続可能性に関する要素、要因を明確化するため、飯田のソーシャルキャピタル（社会関係資本）を可視化し、持続可能な地域づくりとの関係について検証する「ソーシャルキャピタル・フィールドスタディ」を、総務省の「域学連携」地域づくり実証研究事業の受託事業として実施し、3大学29名の大学研究者や学生が参加した。

詳細は、学輪IIDA機関誌「学輪」創刊号における「ソーシャルキャピタルを南信州・飯田で学ぶ」（名城大学 福島茂教授）を参照。

(平成25年度)

#### ●地域環境政策フィールドスタディの実施

立命館大学、名城大学、立命館アジア太平洋大学及び市の連携のもと、飯田における環境モデル都市の取組や多様な主体の実施体制を学ぶカリキュラムとして「地域環境政策フィールドスタディ」を実施し、3大学28名の大学研究者と学生が参加した。

詳細は、学輪IIDA機関誌「学輪」創刊号における「環境をテーマにしたモデルカリキュラムの作成と実践」（立命館アジア太平洋大学 銭学鵬准教授）を参照。

(平成26年度)

#### ●南信州飯田ニューツーリズムフィールドスタディの実施

立命館大学、名城大学、和歌山大学、東洋大学及び市の連携のもと、農山村再生に資するツーリズムの新たな可能性を探るカリキュラムとして「ニューツーリズムフィールドスタディ」を実施し、4大学37名の大学研究者と学生が参加した。

詳細は、学輪IIDA機関誌「学輪」第2号における「南信州・飯田ニューツーリズムフィールドスタディ（共通カリキュラム構築プロジェクト）の成果と課題」（和歌山大学 藤田武弘教授）を参照。

(平成27年度)

#### ●南信州ソーシャルキャピタル・フィールドスタディの実施

立命館大学・名城大学・和歌山大学・東洋大学及び市の連携のもと、飯田における社会関係資本の重層的蓄積を学ぶカリキュラムとして「ソーシャルキャピタル・

フィールドスタディ」を実施し、4大学41名の大学研究者と学生が参加した。

詳細は、学輪IIDA機関誌「学輪」第3号における「ソーシャルキャピタル・フィールドスタディ 2015」（東洋大学 小林正夫教授）を参照。

(平成28年度)

#### ●地域経営論フィールドスタディの実施

立命館大学・名城大学・和歌山大学・東洋大学及び市の連携のもと、地域経営の概念、地域経営の現状、成果や課題、持続可能な地域の実現に向けた地域経営のあり方などを学ぶカリキュラムとして、「地域経営論フィールドスタディ」を実施し、5大学50名の大学研究者と学生が参加した。

詳細は、学輪IIDA機関誌「学輪」第4号における「『地域経営論フィールドスタディ』の実施報告」（立命館大学 平岡和久教授）を参照。

(平成29年度)

#### ●地域文化論フィールドスタディの実施

立命館大学・名城大学・和歌山大学・東洋大学・静岡文化芸術大学及び市の連携のもと、飯田の人々の地域への愛着や帰属意識を地域文化の観点から明らかにすることを通じて地域活性化を実現するための地域アイデンティティの形成のあり方などを学ぶカリキュラムとして、「地域文化論フィールドスタディ」を実施し、5大学46名の大学研究者と学生が参加した。

詳細は、学輪IIDA機関誌「学輪」第5号における「学輪IIDA共通カリキュラム構築プロジェクト地域文化論フィールドスタディ 2017」（静岡文化芸術大学 高島知佐子准教授）を参照。

#### ○学輪インターユニバーシティオープンキャンパスプロジェクト

大学の研究力に期待する社会的な状況がある中、学輪IIDAに参加する大学関係者相互に最先端かつ高度な知見に触れ共有する機会を提供し、学際的な見識やネットワークに寄与する場という学輪の可能性を追求するため、学輪IIDAメンバーの研究者としての専門性と教員としてのスキルを活かした、全世代向けの公開講座の実施を目指す。

(令和元年度)

#### ●イベントの実施

将来的な展開を検討するため、試験的に公開講座（ブレオープンキャンパス）を実施した。

講師陣 5名

立教大学／ESD研究所所長 阿部 治 教授

法政大学 石神 隆 名誉教授

埼玉大学基盤教育研究センター

七田 麻美子 准教授



宇都宮大学バイオサイエンス教育研究センター

塚原 直樹 特任助教

東京農工大学大学院 土屋 俊幸 教授

(令和2年度)

#### ●飯田学輪大学の実施

地元講師の参加、参加者同士の交流機会となることを目指し、12講座を実施した。

講師陣 13名

津田塾大学 伊藤 由希子 教授

国立天文台 大石 雅寿 特任教授

津田塾大学 大島 幸 客員研究員

京都外国語大学 影浦 亮平 講師

飯田市美術博物館 四方 圭一郎 学芸員

法政大学 高柳 俊男 教授

宇都宮大学 塚原 直樹 特任助教

法政大学 西澤 栄一郎 教授

飯田市歴史研究所 羽田 真也 研究員

東京農工大学 堀尾 正靱 名誉教授

国土館大学 堀口 朋亨 准教授

飯田市美術博物館 横村 洋介 学芸員

国立長寿医療研究センター 宮國 康弘 研究員

(令和3年度)

#### ●飯田学輪大学の実施

学輪IIDAの取組展開報告、地元講師の参加、参加者同士の交流機会となることを目指し、10講座を実施した。

講師陣 7名、4団体

学輪IIDA共通カリキュラム実行委員会

立命館大学 平岡 和久教授

日本福祉大学 宮國 康弘 講師

大阪商業大学 藤井 至 専任講師

松本大学 田開 寛太郎 専任講師

立教大学ESD研究所

立教大学 阿部 治 名誉教授

麻布大学 小玉 敏也 教授

鶴見大学短期大学部 増田 直広 講師

飯田市公民館 秦野 高彦 副館長

飯田市美術博物館 近藤 大知 学芸員

法政大学 西澤 栄一郎 教授

東京農工大学 堀尾 正靱 名誉教授

飯田市歴史研究所 福村 任生 研究員

飯田市美術博物館 織田 颯行 学芸員

東洋大学 樋口 貴彦 助教

学輪IIDAプロジェクトみらい

津田塾大学の皆さん

明治大学建築・アーバンデザイン研究室の皆さん

飯田女子高校の皆さん

#### ○プロジェクトみらい

地域課題に向き合う飯田の高校生や、大学生等からの実践発表により、グローバルな視点でポスト2020の地域(日本)を考えることを目的として、学輪IIDA10周年記念「地方発 若者の未来を考えるシンポジウム」の実施を目指す。

#### 4 学輪IIDA共通カリキュラム実行委員会の設立

(平成30年度)

実行委員会は、飯田の価値の発見・共有化することで、飯田における研究や教育のコアを確認し、学びの体系化・「見える化」を進めることで、飯田や学輪IIDAの磁力を高め、新たな域学連携、大学間連携を通じて、地域と大学が共に学び合う場づくりや、高校と大学の有機的な連携の在り方の検討や実践的な展開等により、学輪IIDAのコンセプトである「21世紀型の新しいアカデミーの機能や場づくり」へ繋げることを目指す。

取組の柱

「共通カリキュラムの本格的な展開」

「高校と大学の連携した取組の展開」

##### ①ソーシャルキャピタルフィールドスタディ

東洋大学・名城大学・立命館大学・和歌山大学・  
下伊那農業高校・飯田女子高校・飯田風越高校  
大学57名 高校生5名

(外 一部参加高校生18名)

##### ②地域経済フィールドスタディ 2018

大月短期大学・静岡文化芸術大学・立命館大学  
大学44名

##### ③遠山郷エコ・ジオパークフィールドスタディ 2018

京都外国語大学・東京農工大学大学院・  
松本大学・飯田OIDE長姫高校・飯田女子高校  
大学生・院生11名 高校生8名 教員9名

ソーシャルキャピタルフィールドスタディ及び遠山郷  
エコ・ジオパークフィールドスタディは、飯田の高校生  
も参加し、地域の学びを通じて大学生の学びを体感する  
機会となった。

(令和元年度)

「高校と大学の連携した取組の本格的展開」

##### ①ソーシャルキャピタルフィールドスタディ

首都大学東京・同志社大学・東洋大学・名城大学・  
立命館大学・飯田高校・飯田女子高校・  
飯田風越高校・下伊那農業高校

大学生30名 高校生15名 教員7名

(外 一部参加高校生19名)

##### ②アグリノベーションフィールドスタディ

大月短期大学・立命館大学・和歌山大学・  
飯田高校・飯田OIDE長姫高校・飯田女子高校・

下伊那農業高校

大学生53名 高校生24名 教員13名

(外 一部参加高校生1名)

③遠山郷エコ・ジオパークフィールドスタディ 2019

東京農工大学・松本大学・飯田OIDE長姫高校・

飯田女子高校・飯田風越高校

大学生・院生11名 高校生13名 教員7名

(令和2年度)

「オンラインを活用した試行的取組」

①飯田の地域づくりに学ぶオンラインフィールドスタディ

飯田の取組を幅広く切り取るため、「地域自治」「着地型観光」「地域経済」の3コースを設定し実施した。

「新たな学びの形」の試行的取組として、大学生全員がオンライン参加で実施した。

大月短期大学・東洋大学・名城大学・立命館大学・

和歌山大学

大学生51名 教員10名

②遠山郷エコ・ジオパークフィールドスタディ 2020

オンライン参加の大学生と実際に現地調査も行う高校生によるハイブリッド型の取組として実施した。

麻布大学・東京農工大学・松本大学・

飯田OIDE長姫高校・下伊那農業高校

大学生・院生12名 高校生11名 教員8名

(令和3年度)

「高校と大学が連携し、オンラインを活用した取組」

①ソーシャルキャピタルフィールドスタディ

大阪商業大学・東京都立大学・東洋大学・

名城大学・立命館大学・和歌山大学・飯田高校・

飯田風越高校・下伊那農業高校・飯田女子高校

大学生32名 高校生8名 教員7名

②地域経済フィールドスタディ

大月短期大学・大正大学・東洋大学・法政大学・

立命館大学・飯田OIDE長姫高校・下伊那農業高校・

飯田女子高校

大学生57名 高校生8名 教員5名

③遠山郷エコ・ジオパークフィールドスタディ 2021

麻布大学・帝京科学大学・東京農工大学・松本大学・

飯田高校・下伊那農業高校・飯田女子高校

大学生・院生13名 高校生19名 教員7名

(令和4年度)

「高校と大学が連携し、オンラインを活用したハイブリッド形式の取組」

①多様性社会+ソーシャルキャピタルフィールドスタディ

東洋大学・名城大学・立命館大学・和歌山大学・

飯田高校・飯田風越高校・飯田OIDE長姫高校・

下伊那農業高校・飯田女子高校

大学生42名 高校生26名 教員6名

②地域経済フィールドスタディ

大月短期大学・大阪商業大学・京都外国語大学・

大正大学・和歌山大学・飯田風越高校・

飯田OIDE長姫高校・下伊那農業高校・飯田女子高校

大学生52名 高校生9名 教員7名

③遠山郷エコ・ジオパークフィールドスタディ 2022

麻布大学・東京農工大学・松本大学・下伊那農業高校

大学生12名 高校生5名 教員5名

5 学輪IIDAスペシャルシンポジウム

シリーズ『いいだの未来デザインを考える』

～ after/with コロナ時代における地方の

パラダイムシフトと創生 ～

大学連携会議「学輪IIDA」の専門性やネットワークを最大限に活かし、コロナ時代のパラダイムシフトをどのように捉え、新たな方向に向かっていくべきか、リニア時代を見据えた飯田の未来について考えるシンポジウムを全3回シリーズで開催した。

●第1回(令和2年8月24日)

「コロナで始まる(変わる)新しい時代を模索する」

[議論にあたって]

法政大学 名誉教授 石神 隆 氏

(いいだ未来デザイン会議委員)

[ディスカッション]

コーディネーター:

信州大学 特任教授 中嶋 聞多 氏

パネリスト:

NTTデータ経営研究所

取締役 唐木 重典 氏

京都大学大学院 教授 諸富 徹 氏

ドイツ日本研究所

所長 Franz Waldenberger 氏

(公財)南信州・飯田産業センター

専務理事 萩本 範文 氏

●第2回(令和2年9月3日)

「飯田だから実現できる未来戦略 ～つながりと交流の先に～」

コーディネーター:

日本経済研究所 常務理事 大西 達也 氏

(いいだ未来デザイン会議委員)

パネリスト:

愛知大学 教授 戸田 敏行 氏

金沢工業大学 客員教授 竹内 宏彰 氏

東京大学大学院 教授 牧野 篤 氏

和歌山大学 教授 尾久土 正己 氏



大学連携会議「学輪IIDA」名簿

(敬称略 R4.12.25現在)

	氏名	大学機関等名・学部
1	新井野 洋一	愛知大学
2	岩崎 正弥	愛知大学
3	黍嶋 久好	愛知大学
4	戸田 敏行	愛知大学
5	小玉 敏也	麻布大学
6	黒岩 長造	飯田女子短期大学
7	北林 ちなみ	飯田女子短期大学
8	武分 祥子	飯田女子短期大学
9	新海 シズ	飯田女子短期大学
10	青木 千恵美	飯田女子短期大学
11	兼子 純	愛媛大学
12	大串 恵太	追手門学院大学
13	藤田 武弘	追手門学院大学
14	小畑 力人	大阪観光大学
15	若生 謙二	大阪芸術大学
16	藤井 至	大阪商業大学
17	青木 伸一	大阪大学
18	土井 健司	大阪大学
19	槇平 龍宏	大月短期大学
20	七田 麻美子	オープンサイエンスギルド、埼玉大学
21	菊地 浩平	オープンサイエンスギルド、筑波技術大学
22	塚原 直樹	オープンサイエンスギルド、宇都宮大学
23	竹内 宏彰	金沢工業大学
24	野間 晴雄	関西大学
25	草郷 孝好	関西大学
26	西尾 恵理子	九州共立大学
27	尾上 百合加	九州共立大学
28	廣岡 裕一	京都外国語大学
29	中嶋 大輔	京都外国語大学
30	枝元 益祐	京都外国語大学
31	宮口 貴彰	京都外国語大学
32	村山 弘太郎	京都外国語大学
33	宮木 いっぺい	京都産業大学
34	松崎 行代	京都女子大学
35	諸富 徹	京都大学
36	堀口 朋亨	国士館大学
37	木村 暁	国立遺伝学研究所
38	大石 雅寿	国立天文台
39	中嶋 智子	佐久大学
40	中村 聡志	山陽学園大学
41	渡邊 信彦	事業構想大学院大学
42	高島 知佐子	静岡文化芸術大学
43	増田 幸宏	芝浦工業大学
44	飯島 真里子	上智大学
45	銭 学鵬	上智大学大学院
46	田中 清	信州大学
47	脇若 弘之	信州大学
48	柳原 正明	信州大学
49	佐々木 邦博	信州大学
50	中嶋 聞多	信州大学
51	上野山 裕士	摂南大学
52	河藤 佳彦	専修大学
53	下畑 浩二	相愛大学
54	西山 巨章	大正大学
55	大橋 重子	大正大学
56	片岡 美喜	高崎経済大学
57	村山 にな	玉川大学
58	影浦 亮平	千葉商科大学
59	仲川 直毅	中京学院大学
60	林 良嗣	中部大学
61	山下 亜紀郎	筑波大学
62	呉羽 正昭	筑波大学
63	伊藤 由希子	津田塾大学
64	大島 幸	津田塾大学
65	曾根原 登	津田塾大学
66	秦 範子	都留文科大学
67	増田 直広	鶴見大学短期大学部
68	Franz Waldenberger	ドイツ日本研究所
69	Isaac Gagné	ドイツ日本研究所
70	Jentzsch Hanno	ウィーン大学

	氏名	大学機関等名・学部
71	儀間 敏彦	東海大学
72	牧野 篤	東京大学
73	新藤 浩伸	東京大学
74	李 正達 (イ・ジョンヨン)	東京大学
75	瀬田 史彦	東京大学
76	大杉 寛	東京都立大学
77	友田 清彦	東京農業大学
78	寺内 光宏	東京農業大学
79	千賀 裕太郎	東京農工大学
80	土屋 俊幸	東京農工大学
81	朝岡 幸彦	東京農工大学
82	榎本 弘行	東京農工大学
83	澤 佳成	東京農工大学
84	竹本 太郎	東京農工大学
85	堀尾 正毅	東京農工大学
86	大倉 茂	東京農工大学
87	井口 貢	同志社大学
88	多田 実	同志社大学
89	有井 健	同志社大学
90	小林 正夫	東洋大学
91	佐々木 茂	東洋大学
92	澤田 俊明	徳島大学
93	蜂谷 充志	常葉大学
94	大貝 彰	豊橋技術科学大学
95	井上 隆信	豊橋技術科学大学
96	松島 史朗	豊橋技術科学大学
97	浅野 純一郎	豊橋技術科学大学
98	中川 亮平	長野県立大学
99	加藤 博和	名古屋大学
100	中村 英樹	名古屋大学
101	エマニュエル・レレイト	名古屋大学
102	大濱 裕	日本福祉大学
103	江原 隆宜	日本福祉大学
104	宮國 康弘	日本福祉大学
105	大塚 理加	国立研究開発法人防災科学技術研究所
106	高柳 俊男	法政大学
107	曾 士才	法政大学
108	大西 亮	法政大学
109	小門 裕幸	法政大学
110	酒井 理	法政大学
111	石神 隆	法政大学
112	西澤 栄一郎	法政大学
113	岡司 直也	法政大学
114	辛島 一樹	前橋工科大学
115	白戸 洋	松本大学
116	田開 寛太郎	松本大学
117	江成 穰	松山大学
118	劉 一辰	明海大学
119	竹本 田持	明治大学
120	横井 勝彦	明治大学
121	小川 智由	明治大学
122	水野 勝之	明治大学
123	大友 純	明治大学
124	佐々木 宏幸	明治大学
125	福島 茂	名城大学
126	井内 尚樹	名城大学
127	蘭 信三	大和大学
128	阿部 治	立教大学
129	野田 健太郎	立教大学
130	井出 万秀	立教大学
131	廣江 彰	立教大学
132	JONES Thomas Edward	立命館アジア太平洋大学
133	須藤 智徳	立命館アジア太平洋大学
134	森 裕之	立命館大学
135	平岡 和久	立命館大学
136	佐藤 龍子	龍谷大学
137	尾久土 正己	和歌山大学
138	大浦 由美	和歌山大学
139	岸上 光克	和歌山大学
140	山本 由美	和光大学
141	早田 宰	早稲田大学

※上記のほかオブザーバー参加の大学研究者もいらっしゃいます



# 学輪IIDA 機関誌「学輪」 —投稿規程—

制定 平成26年4月1日  
改定 平成27年4月1日

## 1. 掲載論文の原則

- (1) 掲載原稿は、依頼原稿と投稿原稿に分けられる。
- (2) 投稿原稿の категорияは、原則として「論文」「論説」「研究ノート」「調査報告」「講演記録」「その他」とし、依頼原稿においては、編集委員会において適当なカテゴリ設定をできる。また、投稿原稿については、上記の категорияでは適応できないと判断できるものについては、執筆者と編集委員会において適切なカテゴリの設定をできる。
- (3) 掲載原稿は、日本語によるものとする。但し、事前に編集委員会が認めたものはこの限りではない。
- (4) 依頼原稿は、編集委員会における編集方針のもと編集局より依頼する。
- (5) 投稿原稿「論文」については、査読に付す。「論文」以外の categoriaの投稿原稿については、編集委員会が採否を決定する。
- (6) 執筆要領については別途定める。
- (7) 原稿の掲載について判断は編集委員会で行う。
- (8) 依頼原稿については、掲載ページ1頁につき1,500円の原稿料を支払う。
- (9) 査読については、1原稿5,000円の査読料を支払う。
- (10) 事務局が特約を締結した場合を除いて、掲載原稿の著作権は学輪IIDAに帰属する。但し、執筆者自身は、当該原稿について自由に利用できる。なお、その場合、利用箇所、掲載し、発行年月等を速やかに事務局に報告しなければならない。

## 2. 投稿の条件

- (1) 学輪IIDAのコンセプトに合致した内容であること
- (2) 原稿は未発表のものに限る。但し、既掲載であっても編集委員会もそれを認め、現掲載箇所を示した場合はその限りではない。
- (3) 投稿原稿は、学輪IIDAの構成員又はその指導する大学院生若しくは大学院修了者によるものとする。共著の場合は、筆頭著者が当該要件を満たす必要がある。
- (4) 学輪IIDAの構成員の指導する大学院生又は大学院修了者が投稿する場合、学輪IIDAの構成員たる指導教員の承認を得なければならない。当該指導教員は、その承認を与えるに当たり、本紀要の掲載に耐えられる内容で

あることを確認しなければならない。

## 3. 投稿原稿の内容

飯田市における取り組みに関する研究の成果及び特定の地域・資料等の調査結果に関する報告、又は上記以外で、「21世紀型の新しいアカデミーの機能や場をつくる」という学輪IIDAコンセプトの推進に寄与するもの。

## 4. 投稿原稿の採否

投稿原稿「論文」は、査読に付す。査読実施の要領については以下に示す通りである。

- (1) 査読は、2名で行う。査読者は編集委員会における協議の上、編集局より依頼する。なお、査読者のうち最低1名は学輪IIDAの構成員とし、学輪IIDAの構成員以外のものに査読を依頼する場合は、編集委員会は学輪IIDAの趣旨及び査読要領を理解できる者を選任することとし、編集局は査読者に対してその旨周知する。
- (2) 査読者は、次の点に留意して査読をする。
  - 1) 原稿条件に合致しているかどうか
  - 2) 誤字、脱字がないかどうか
  - 3) 他の文献等からの無断引用、剽窃、出典の不記載など著作権をしていないかどうか
  - 4) 執筆要領に反していないかどうか
  - 5) 著しく論理性を欠くなど掲載に耐えられないものでないかどうか
  - 6) 査読者との見解の相違や新規性のある着眼点であったり、提言、発想等であることにより成熟性が欠けることを理由に、当該原稿を否定したり、新たな展開の可能性の芽を摘んでいないかどうか
- (3) 査読者は、投稿原稿につき、「掲載」、「修正後掲載」、「改稿後掲載」、「不掲載」の判断を編集局に通知する。また、査読者は「修正後掲載」の場合その箇所を、「改稿後掲載」の場合はその理由及び改稿のための指針、「不掲載」の場合はその理由を付して通知しなければならない。編集局はその結果を執筆者に通知する。なお、「掲載」はそのまま掲載を可能し、「修正後掲載」は、修正箇所が修正されているかを編集局で確認の上掲載する。この場合この時点で「掲載」と判断されてものとする。また、「改稿後掲載」については再度査読に付す。
- (4) 2名の査読者のうち1名が「掲載」と判断した場合は、掲載を認めるものとする。但し、執筆者においては、他の判断の理由を考慮してその範囲において一部変更することを可能とする。
- (5) 上記にかかわらず「掲載」が認められない場合は、執筆者は編集委員会に異議申し立てをすることができる。但し、学輪IIDAの構成員の指導する大学院生又は大学

院修了者が異議申し立てをする場合、学輪IIDAの構成員たる指導教員の承認を得なければならない。

(6) 前項の場合、編集委員会は、査読者及び執筆者の主張を考慮して、掲載についての判断を行う。なお、必要な場合は、対質の場を設定することができる。

(7) 査読者は匿名とするが、前項の対質を行う場合は、この限りではない。

## 5. 投稿手続き

投稿者は、正本1部、副本2部、および電子データを本学会編集委員会宛に提出する。

## 6. 経費負担

投稿料は徴収しない。ただし、刷り上がり頁数が執筆要領に記した上限頁数を超えた場合には、1頁あたり3,000円の超過料金を請求することがある。また、図版の作成し直しや特殊な印刷を必要とする場合、著者に実費を請求する。

## 7. 校正

著者校正を原則とする。必要に応じて編集委員会が校正を行う場合がある。

## 8. 抜刷

50部は無償配布する。それ以上必要な場合は、実費請求する。

# 学輪IIDA 機関誌「学輪」 —執筆要領—

制定 平成26年4月1日

## 1. 原稿の構成と書式

投稿する原稿の執筆に当たっては、原則としてワープロまたはパソコンを用いて作成すること。

また、原稿はA4用紙を用い、表紙・本文・注・参考文献・図表・要旨で構成する。各構成要素の書式は以下のとおりである。

- (1) 表紙：表題・著者名・所属（原則1つ。ただし編集委員会が認めた場合はこの限りでない）・キーワード（5つ以内）を日本語と英語で記載する。書評については、キーワードのかわりに対象論文、書籍の書誌情報を原著の言語で記載すること。また、投稿原稿の種別についても明記すること。
- (2) 本文：日本語の場合、横書きで1頁あたり40行×40字で印刷する。外国語の場合はこれに準じた分量で印刷すること。
- (3) 注：番号順に掲載し、本文中の該当箇所に番号を付すこと。使用しない場合は省略することができる。
- (4) 参考文献：書籍の場合は「著者名・署名・出版社名・発行年」、論文の場合は「著者名・論文名・雑誌名・巻号・頁・発行年」に関する情報を必ず記載し、アルファベット順に並べて掲載すること。ただし、文献の挙示は著者の採用する方式に準拠するものとする。使用しない場合は省略することができる。
- (5) 図表：本文中に出てくる順に、注とは別に番号を付与し、本文中の該当箇所にあらかじめ表示するか、該当箇所を指示すること。ただし、図と表の両方を使用する場合は、それぞれで番号を別に付与すること。使用しない場合は省略することができる。
- (6) 要旨：日本語の場合は400字以内、外国語の場合はこれに準じた分量とする。

## 2. 原稿の分量

刷り上がり頁数で、10頁を上限頁とする。1頁の刷り上がりは26字×47行×2段（2,444字）である。この長さを超えるものでも、編集委員会が必要と認めた場合は、掲載することがある。ただし、上限頁を超えた場合には、投稿規程に従った超過料金を請求することがある。

## [執筆者一覧] (掲載順)

---

田開 寛太郎 (松本大学大学院総合経営研究科)  
中村 琢磨 (松本大学大学院総合経営研究科)

## [通信欄]

---

学輪IIDA機関誌「学輪」は、学輪IIDAの取り組みや大学・研究者等の飯田市における教育・研究活動の成果を実績として蓄積するとともに、その内容を広く発信し多くの方に知ってもらうことを目的として、2014年度に学輪IIDAメンバーの発意により創刊され、以来発刊を重ねてまいりました。

このたび第10号の発刊にあたり、ご投稿いただいた方をはじめ、ご協力をいただいた多くの関係者の皆様にご場をお借りして深く感謝申し上げます。

今後も、機関誌「学輪」の発行を通して、全国から飯田に集う大学・研究者の皆様の知見が蓄積され、学輪IIDAのネットワークがさらに広がるよう、掲載内容の充実に取り組んでまいりまいる所存ですので、皆様からの積極的な投稿を心よりお待ちしております。

## [編集委員]

---

平岡 和久 (立命館大学政策科学部)  
福島 茂 (名城大学都市情報学部)  
小林 正夫 (東洋大学社会学部)  
廣岡 裕一 (京都外国語大学国際貢献学部)  
上野山裕士 (摂南大学教育イノベーションセンター)  
藤田 武弘 (追手門学院大学地域創造学部)  
藤井 至 (大阪商業大学経済学部)

## [編集局]

---

編集局長 藤田 武弘  
編集局 藤井 至

## [事務局]

---

飯田市 企画部 大学誘致連携推進室  
大学誘致連携係

---

大学連携会議「学輪IIDA」

機関誌「学輪」

第10号 2022

(年1回発行) 2023年3月発行

●  
発行

飯 田 市

395-8501 飯田市大久保町2534番地

0265-22-4511

<https://www.city.iida.lg.jp>

●  
印刷所

龍共印刷株式会社

---